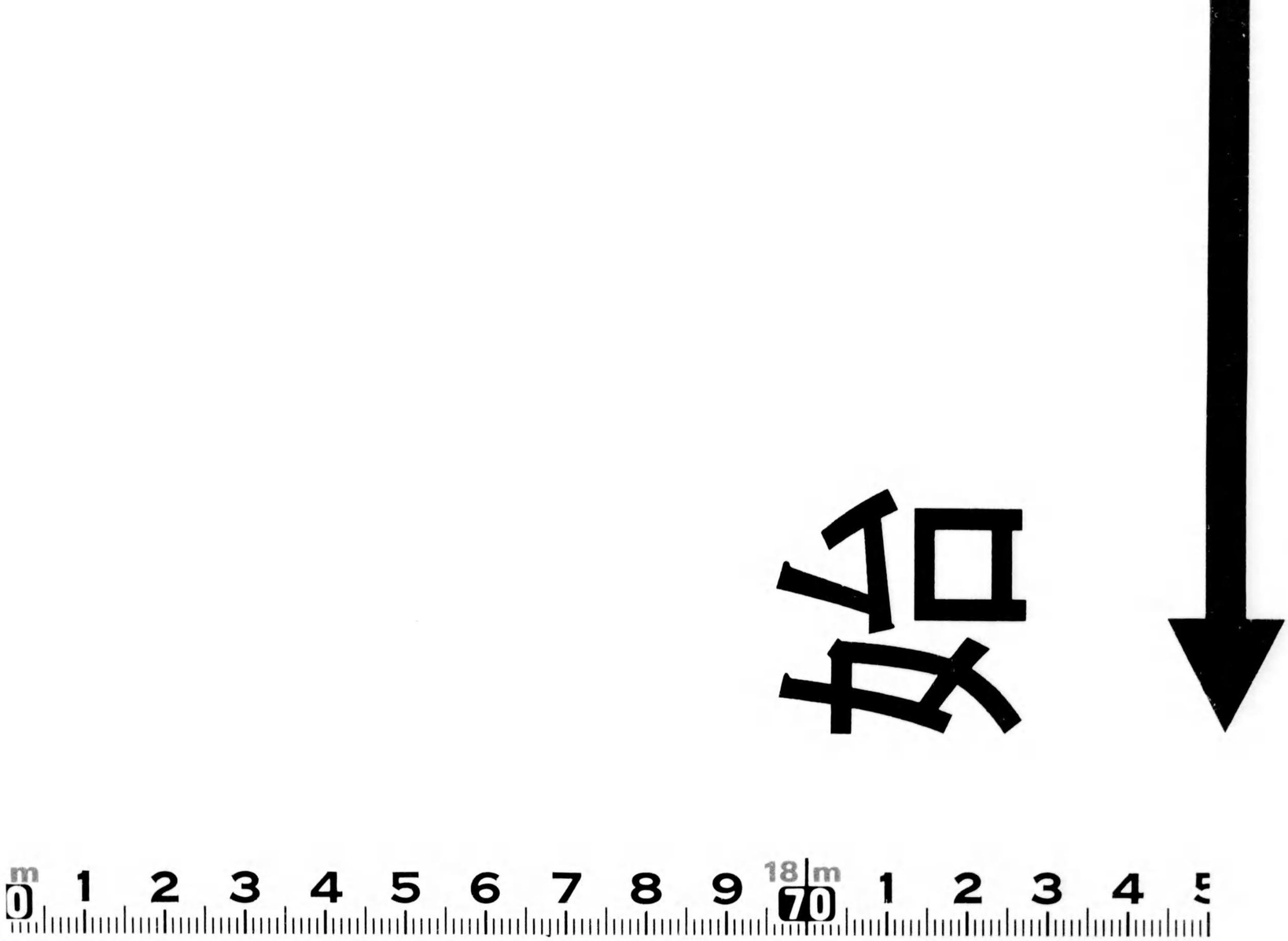
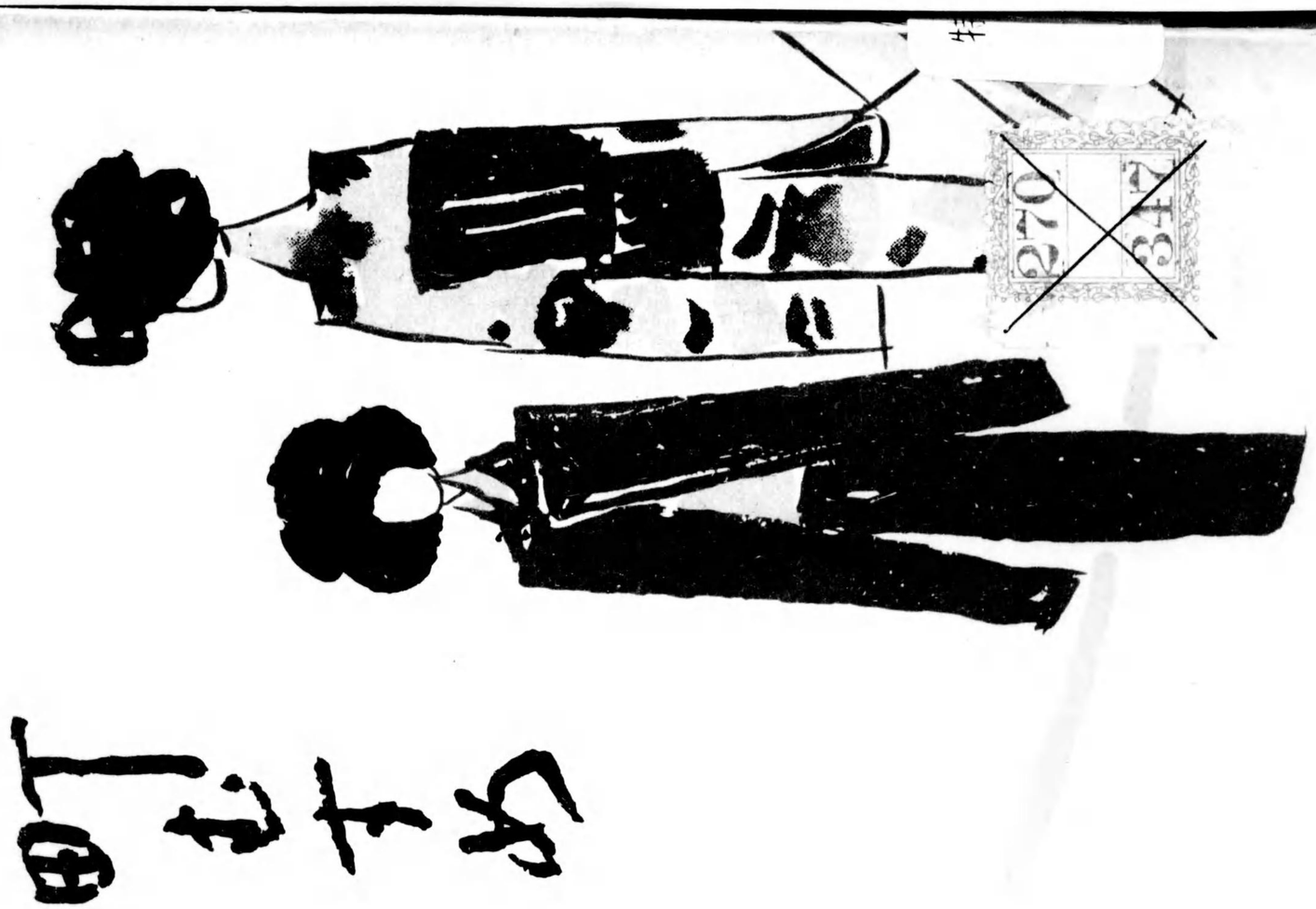

出口
m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 70 1 2 3 4 5


ダメです
270
2.13

著者前島優梨子

めすむ町

第一版

序

私はこの作者の作品に親みの深いと言ふ事を否めない。永い間、この人の作品について、貧しい心からながら、忠告をし、勵ましして來た事を思ふと、一歩すゝんで、作品の背後にある作者とも、親みの深い心持を感じるのである。

今、この人の作品を一つに纏めて、公にされると言ふ計畫を聞いた時に、私は改めて、この三年に渉つた、この人に對する記憶を思ひ浮べた。

それを今述べて、この著の序としようと思ふ。

この作者は極めて從順な、優しい、小さい心を持つて居る人であるらしい。この作品に接見て、その心が映つて居る。その中でも、特に、私の目に映るのは、この人の從順であると言ふ點である。

この人の作品は、新しく生れた人としては、むしろ完成し過ぎて居ると思はれる。心

大正
1. 8. 9
内交

目次（町むすめ）

頁

△お濱……一
△犀川……一〇
△道代……一八
△お浚ひ……二三
△クラス會にて……三一
△本郷の兄……五〇
△暖簾縫……六五
△復讐……七四
△不安……八六
△結納……九七
△祖母……一〇八
△母……一二五
△嫂……一三五
△お稽古歸り……一四六
△母と嫂……一五九
△お祖父さん……一六八
△不平……一七九
△轉宿……一八七
△寂しき家……一九七
△Kさん……二〇七
△繼母……二一四
△見立祝ひ……二二二
△里歸り……二三七

が豐かに丸く美し過ぎる。安らな呼吸でありすぎる。しかし、私が斯う言ふのは、この人に對する不平を漏したのではない。前に述べたやうに思はれる程、この人の心は靜かである。私はこれを愛する。この人の心が靜かであるのは、妄に眠つて居るのでは無い。たゞ美しく、厚く守られて居るのであると思ふ。この味ひは林檎の味ひである。さうである。林檎の味ひである。

特にこの集の中で、「暖簾縫ひ」がこの人の代表的の作である。

七月九日未明

水野葉舟

町むすめ

前島優梨子作

お濱

お濱はまた何時の間にか鹽藏の二階へ上つた。そして横町の狹い通りに向いた、小さな窓の鐵格子につかまつて、ジロ〳〵と落着きのない眼をして、人通りの少ない夕暮の街を見下して居た。

「ヤア富屋のお濱さんがまた居るよ」と斜向ふの物置らしいザラザ

ラした砂壁に寄りかゝつて、寒さうに懐手をして何か、喋舌つて居た二人の子守女の小さい方のがぐいと見上げて口早に云つた。

「あれ眞實だ、お濱さん！」と片方の元氣の好ささうな嫌に眼の大きなのもすぐ其方を見上げて大きな聲で云つた。そしてすぐ、

「ナアお濱さん、御亭主の傍が戀しいかえ、あゝ戀しいだらうともナア」とからかふ樣に馴れた口調で云ひだした。

其聲を聞きつけたお濱は急にシク〳〵泣き出した。

「逢ひたいかえ！　逢はせて上げるから泣かずになア、綺麗にお化粧して待つてお居で」と今度は小さい方のがさも馬鹿にした樣に、大きな口を開いて不揃ひな黄色い齒を惜しげもなく見せて斯う云つ

た。

お濱はすぐ泣のを止してニコ〳〵と寂しく笑つた。「あア嬉しいともさ、嬉しいともさ」と二人は聲を揃へてはやし立てる樣に云つた。

お濱は何も云はないで只ニヤリ〳〵と嫌な笑ひ方をしながら眤と其下を見下して居た。

「お内儀さん、またお濱さんは鹽藏の二階へ上つて居なさりやす」と頓狂な聲で云ひつけて居る女中のおたけの聲が下から聞えると、お濱は急におびえた樣に小さくなつて窓の下へ蹲まつた。

「また子守子供に調戯れて居るのかえ！　構はずお置き、彼麼に皆

に馬鹿にされてもお姑さんが默つて居なさるんだもの、眞實に恥しくて近所へ顏向けも出來やしない」と嫂のお幾はわざと大きな聲でつけ〳〵と角のある云ひ方をした。

中庭の向ふの四疊半に夫を聞いて居た氣の小さな母のお常は、また何時もの樣に身體まで小さくなる樣な氣がして、息づかへさへそつとして居た。そしてまだ何か云はれはしないかと居堪らない程ハラ〳〵して居た。

お幾はそれきり何も云はないで、何か茶の間で手荒くガタピシやつて居た。

お常は小さくほつとして、そつと音のしない樣に庭に有つた緒の

ゆるい下駄を引掛けた。そして小急ぎに鹽藏へ引きつけられる樣に行つた。

一尺ばかり開いた厚い引き戸の間から、そつと身體を横にして入ると、冷えきつた濕つぽい樣に冷たい空氣がひやりとして、思はずお常はぞく〳〵つとした。

「お濱！」とまだ階子段を半分ばかり上りかゝつた處で、小さい聲で呼んで見た。

けれどお濱は返事をしなかつた。

「お濱や、なぜまた此處へ來るんだえ、あんなに始終云つて居るのに、眞實にお母さんが困るぢやないかえ」とお常はさも持てあまし

た様に少し手強い様に云つた。けれど薄暗い窓の下に冷たさうに素足のまゝしよんぼり蹲まつて居る悲惨な娘の姿を見ると、すぐもう目は潤んだ。

「さア下へお出で、よ！　はア行つてお呉れ、おゝこんなに冷たい身體をして、よくまア病まない事なア」と張りつめて居た氣がゆるんだ様に、終ひの言葉は小さく震へて居た。けれど涙は見せまい見せまいとして、唯きゆつと痛い程強く、お濱の冷たい兩方の手を握り締めた。

お濱は別に何にも感じないらしく、矢張ムッチリとして其處へ蹲まつたまゝ、溫順しく手を握られて居た。

「お濱、濟まないけれどお母さんはなア、早くお前に往生して貰ひたいよ、どうせ生甲斐もないんだから……あゝ決してお母さんだつて殘つては居ないから……」とお常は酷く思ひつめたらしく恁麼事を云つた、それでもお濱は默つて別に情なささうな顏もしなかつた。

「さア〳〵下へ行つておあたり、こんな寒い火の氣のない處に眞實にお前も……」とお常は氣を取り直したらしく、優しくお濱を引き立てた。

お濱は何を思つてかニヤリと氣味の惡い笑ひ方をして溫順しく母に手を捉られて鹽藏の二階を下りた。

小新らしい紅緒の草履と、踵の切れた藁草履とびつこに履いたお

濱は、母屋から離れた陰氣な六疊の自分の部屋へ連れられて行つた。

「おゝまだお前お晝も食べないで、もうお夕飯だのに」と隅の方に片寄せられてある、山盛りにした御飯のお茶碗と、しなびた樣な香の物ばかりが寂しさうに載つて居る、剝げたお膳を見るとお常はまた新らしく胸が一杯になつた。

お濱は中へ入つても別に炬燵へあたるでもなく、冷えきつた御飯を食べ樣とするでもなく、唯寂しさうにして障子の際に立つて居た。

お常も泣きたい樣な氣持になつて默つて居た。

「什麼すれば好いんだか眞實に理由が解りやしない」と突然に元氣の好い嫂の突慳貪な聲が中の間でした、お常はハッとして、思はず

そつとお濱を見上げた。

犀川

姐さん！　澄江姐さんが死んだの、昨晩。あの丹波島の橋から犀川へとんで……

妾ね昨晩夜中に起されてそれを聞いた時は、どうしても嘘だと思つたのよ。だつて昨晩梅ケ枝亭のお座敷へ一緒に行つたんだもの。

けれど〳〵澄江姐さんは眞實に死んだんだわ、奥の四疊半には顔へ白い布を掛けた澄江姐さんが、氷の樣に冷たくなつて、白い着物を逆にかけて貰つたまんま、いつまでも〳〵寐て居るもの。

姐さん、妾情ないわ、一番妾を可愛がつて呉れた姐さんが何一言云つても呉れないで、こんな事をするんだもの。皆ネ、小春ちやん澄江姐さんはお前さんに何か云はなかつた？」つて聞くけれど、眞實に澄江姐さんは何一言それらしい事なんか云つちや呉れなかつたのよ、まだ遺書の樣なものも見附からないの。

今朝ネ、明けがたにお巡査さんが附いて姐さんの死骸を運んで來た時、千代香姐さんもあやめ姐さんも京ちやんも皆ばた〳〵と取次へ驅け出したけれど、妾はどうしても怖い樣な氣がして見に行かれないで、獨きり凝と藝者部屋の炬燵へ俯伏して居たの、けれど何だかまたそつと見たい樣な氣もして居ると、

「小春ちやん被入いよ」とあやめ姐さんが、茶の間の處まで後もどりして呼んで呉れたので、

「ハーイ」とそれをしをに驅け出して、しつかりあやめ姐さんの袂を捉へて後に隱れて居たの、だつて妾もう怖くて胸がどき〳〵して居たんだもの、けれど矢張り見たくてあやめ姐さんの高い肩越しに伸び上つてそつと見て居たの。

外には一杯の人が立つて居たわ、今朝一時にぱつと其噂さが廣がつて、もう近所の騷ぎつてないのよ。

釣臺が入る樣に格子戸を二枚端した入り口へ桐油紙のかゝつた澄江姐さんをそつと下された時は、妾思はずぞつとしてきやつとあや

め姐さんの手を握り締めたの、桐油紙の間から、青い〳〵水ぶくれした姐さんの顏がチラと見えたんだもの。

「まア澄江ちやんとんだ事をして呉れたネ」と眞先にお女將さんが斯う云つて氣味惡さうにそつと桐油紙を端したの、

「まア……」と皆な小さい聲で云つて、顏を顰めて默つて見て居たわ、妾一目見ると身體がぞく〳〵つとしたの、あの眼の好い色艶の綺麗な澄江姐さんの顏が、それは凄い樣に氣味の惡い顏になつて、御年始廻りに一度着たきりのお座敷着がびつしより身體へ着いて居るの、澄江姐さんがそれは氣に入つて喜んで居た金泥入りの結び蝶の裾模樣も何も泥が附いてだいなし、島田の根はがつくり端づれて

居るしネ、斯う頸ばかりぐつたりと横にして居るところなんか、妾よりまだ怖がりの姐さんが見たら屹度氣が遠くなつちまうわ。

澄江姐さん足袋を何處で脱ぎ捨てたか素足なの、下駄は橋の上にあつたつて云ふけれど妾ネ、どうして澄江姐さんがこんな氣になつたんだらうと思ふともう胸が一杯になつて、澄江姐さん！　て抱きつきたい樣な氣がしたの。

其内に濱の家さんからも松三好さんからも大勢姐さんが來て、妾達は邪魔だから京ちやんと二人で默つて藝妓部屋の炬燵にあたつて居たけれど妾ばつかり耐えても〳〵涙が出て、何だか京ちやんに恥しくて困つたわ。

姐さん！　どうして澄江姐さんは死んだんでせう、昨晩梅ヶ枝亭のお座敷へ一緒に行つた時は何時もと鳥渡も變りはなかつたのよ、何だかお酒は隨分飲けた樣だけれど、それが今思へばいつもと違つて、たま〳〵思ひ出した樣に、

「××樣お盃をいたゞきませう」とつッかけた樣に云つては、ぐいぐい飲んで居たの。

其お座敷が濟むと妾はすぐ歸つたけれど、澄江姐さんはそれから秋月へ行つたの、だから妾それからの事は鳥渡も知らないのよ。

あの濱の家の小鈴姐さんがネ

「澄江ちやんも藝妓らしくもない、屹度彼の人を柳家の千松ちやん

に取られたのを苦にしてこんな思ひきつた事をしたんだわ、隨分氣の小さい妓だわネ」つて云つて居たけれど、妾そんな事でぢやないと思ふわ、なんでもあの澄江姐さんがそんな事位で……。ネ姐さん？だつて澄江姐さんには澤井さんて立派な旦那がチャンとあるんだもの、なんであんないけ好かないズングリのなまづ髭なんか……。

姐さん、あの遂此間澄江姐さんは妾に斯う云つたの「小春ちやんお前さんはネ一本になつて立派な旦那が出來たら決して浮氣をするんぢやなくつてよ、眞實其旦那に心中立てするんだわ、いくら浮氣商賣の藝妓だからつて、初生な生娘だつて其道は同じ事だからネ、小春ちやんそれが眞實の藝妓らしい藝妓なんだから」つて。澄江姐

さんは時々斯うしたしんみりした事を云つて聞かせるので、妾はいつもの樣に溫順しくアイつて聞いて居たの。

あの……姐さん妾先刻小用に行かうとしたら茶の間でお女將さんとあやめ姐さんがあのネ、「どうも澄江ちやんは姙娠して居るらしいわ」つて云つて居てよ。

ネ、姐さん、もうそれが眞實だつたら屹度澄江姐さんは……。澄江さんも餘り氣の小さい——。

「三ケ日も濟まない內に緣喜でもない」つてお女將さんはこぼして居るけれど、妾は澄江姐さんが氣の毒でこんな思ひきつた事をした澄江姐さんの心持を妾聞さたい、そつとたゞ妾ばつかりが……。

道代

「お母様富士屋のお千代さんが山下さんへ嫁くんですつて」と道代は投げる様に云つた。

「えゝお千代さんが山下へ嫁くつて？　まア誰がさう云つたえ？」と母のお勝は喫驚した様にぐいと此方を向いて聞いた。

「お奈美さんが云つたんだからまさか嘘ぢやないでせうよ、十五日とか見立て祝ひだつて」と道代は矢張り冷たいすてる様な云ひ方をした。そして、人を馬鹿にして居る、といふ様な心持をあり〳〵と

顔に見せてわざと横を向いて居た。

「まアさうかネ、矢張りだん〳〵年はしなさるし自分でも考へなすつたんだらうよ、二度目だからつていくらも運の好いものは……」とお勝は見て居た新聞を疊みながら、何となく羨しさうな云ひ方をした。

道代はむら〳〵としておもふさま反抗して見たい様な氣がした。けれどそれを顔には見せないで、凝と默つてわざと何でもない様な顔をして、前にあつた新聞をくいと引き寄せて見て居た。

「十五日では屹度明日あたり御招待狀が來るだらうよ、お前それあの襦袢の袖が合はないつて云つて居たぢやないかえ？」とお勝は氣

を變へた樣に輕く云つて道代の顏を見た。

「私行かないお招ばれしたつて」と道代は眼を上げ樣ともしないで、讀むでもなく眤と新聞の三面を見ながら云つた。「なぜさ、さぞ御仕度が出來たらうに行つて御らん、山下さんでも幸せだこと、二度目でもあんな嫁さんが貰へて、家なんかなら紋付一重ねどうやらだつたのに」とお勝は終ひを獨言の樣に低い聲で云つた。

道代は何か云はうとしたけれど默つて終つた。そして普通な顏をして居たけれど、もう胸の中は堪らない程いら〳〵して居た。

夏頃其話が道代に出た時、道代は嫁かうとも思ひさうにもしないのにお千代は「道代さんが山下樣へ嫁くんですつて、まアどんな氣

がしたでせうネ、いくら財產があるの何のつたつて二度目なんか、しかも目の前の林屋の雪さんが嫁つた後ぢやありませんか」とさも輕蔑んだ樣に逢ふ人毎に云つて居たといふのを道代はちらと耳にして。其時道代はもうむら〳〵として思ふさま氣の晴れるまで、つけ〳〵お千代に云はうと餘程思つたけれど、「いゝわ、今に見て居れば解るんだから」と思ひ直して凝と默つて知らない顏をして居た。

「人が知らないと思つてよくも……」と思ふと、どんな顏をして居るか見立て祝ひに行つて見てやりたい樣な氣がした。そして思ひ切つて云つてやらうかといふ樣な氣にもなつた。さうした時は斯う何ともいはれない勝ち得た樣な冷やかに見返してやつた樣な强さを覺

えるけれど、すぐまた、何だか踏みつけにされた様な馬鹿にされた様な氣がしてじり〳〵した。

「もうお前の友達は大抵嫁つたネ」と娘の心持ちを知らないお勝は思ひ出した様に云つて猶更道代の心をいら〳〵させた。

道代はまた默つて居た。もう當り散らしたくて堪らない様な氣がしたけれど。

お勝はそれぎり忘れたらしく何も云はなかつた。道代はいくらかほつとしたけれど矢張りいら〳〵する心持は消えなかつた。

お浚ひ

今度始めて踊のお浚ひに出す吾妻家では、もう一月も前から何となく氣忙しい様な、斯う凝と落着いては居られない様な氣がして居る。

關の扉で花香の着る墨染の着物と、清元の三社祭を踊る小雪と千代子の揃ひの單衣は、とうに京都へ染にやつた。瀧夜叉姫の前帶も矢張り京都まで刺繍にやつた。そしてお女將は指を折つては、もう來さうなものだと自烈たさうにして待つて居た。

「始めてなんだからネ、皆みつしりやつて頂戴よ」と始めはお女將がやつきとなつて心配さうに皆をせめて居たけれど、もう終ひにはお女將より却つて藝妓達の方が一生懸命になつて居た。

もう皆氣が氣ではなひと見えて、其日が近づくにつれて藝妓達の朝起きが早くなつた。

いつも姐さん達に夜着を撥られる一番寢坊の小靜といふお雛妓までが皆に負けない、早く起きては、自分のする式三番と晒おかねの三味線を一生懸命に稽古した、將門の瀧夜叉姫を踊る小美代は、地方もそれから對手の將門も濱の家なので、用さへなければ濱の家へ行つて居た。

「やア何處ともなく見馴れぬ女、此山かげの關の扉へいつの間にどこから來たのだ」

「アイ私しやアノ撞木町から來やんした」

「ム、何しに來た」

「逢ひたさに」

「そりや誰に」

「こなさんに」

「何おれに、そりやなぜ」

と聲の好いそして顏も綺麗な花香と踊の上手い梅吉は舞臺ですると通りの大きな聲で、狹い藝妓部屋で日に幾度となく關の扉のせりふ

を云ひ合つて居た。

「かくなる上は何をか包まん、われこそ中納言家持が嫡孫天下を望む大伴の黒主とはおれがことだはやい」

「さてこそ」

「我に恨みをなさんとするそも先汝は何者ぢや」

「のふ、去りし恨みのあればこそ抑人間のぎやう受けて、女子とは見すれども小町櫻のせい魂なり」と醉どれらしい關兵衞の太い大きな聲と、凄い樣に澄んだ聲で靜かに判然と上手く云ひ廻す花香の臺詞とはよくしつくりと合つて居た。

關の扉の地方には一番姐さんのおつまも入つて三味線を引くけれ

ど、二人では始めから踊れないので踊はさう稽古しなかつた。

「――内より出づる血汐の片袖手に取り上ぐれば懷中に深く祕め置く管合の――」とおつまが小さい聲で唄ひながら絃を稽古して居ると、

「姐さんそこの處の調子の上手くネ、妾間拍子が取れなくて踊りにくいから」と關兵衞の梅吉は傍に聞いて居ながら踊つて居る樣な氣持ちで賴んだ。さうすれば「ちよいと妾の、御兄君の身にかはりあへなく此世を去り給ふ夫の遺身の片袖に……のあたりの處もネ」と墨染の花香も氣がゝりさうに云つた。

お女將は皆の仕度を揃へるに一心配だつた。お師匠さんに聞き聞

きしては其二三日前までに大抵揃へた積りだつたけれど。

「あ、瀧夜叉の足駄がまだ出來て來ない、おや三社祭のしごきも、一つないわと其日になつてあわたゞしく下駄屋へ電話を掛けたり縮緬の白いしごきを借りにやつたりした。お浚ひの其日は稀な小春日和の暖かい好い日であつた。前日から飾りつけをした××座の天井には、東京の株式仲買の小宮といふのから花香と梅吉に呉れた緋と白の縮緬のビラが可成り大きく目立つて見えて居た。

外の藝妓家のも隨分澤山下つて居たけれど、何となく吾妻家のばかりが際立つて見える樣な氣がした。

足踏みの音が氣持ち好く響く踊り舞臺に直された舞臺の中の樂屋

は、何家々々と一つ〳〵鳥渡區切られて、どの部屋も〳〵坐るところの無い樣に衣裳や道具一杯になつて居た。

踊に出る花香も梅吉も小美代も皆前の日結つたばかりの島田を惜しげもなく頽して、妙な格構の鬘下地に下の方へ結つた。そして、

「可笑しな顏になるわネ」

「實際だ、けれど輕くて好い氣持だわ」なんて云つて笑つて居た。

「靜ちやんでも千代ちやんでも誰でもネ間違ひたつて笑つちや不可ませんよ、知らん顏して居なくちや」とお女將は皆の出掛けに心配さうに念をついた。

「お女將さん濟みませんがあの撒くハンカチを下さいな」と引詰め

鬘下地に結つた梅吉が關兵衛とは思はれない程調子の高い好い聲で云つた。

「あゝさう」とお女將は思ひ出した樣に長火鉢の向ふの用簞笥の上に澤山重ねてある、鉞と大きな櫻の木を墨繪で書いて、其櫻の小枝に掛けた片袖に吾妻家、梅吉、花香と綺麗な字で結構よく書いた、關の扉をきかせたハンカチをすぐ梅吉に渡した。

「ぢや妾達もう行きますわ、お峯さん——仕度をする人は——行つて居るんでせう」と樂屋取締りのおつまは皆を連れて先に立つた。

お女將も小靜の式三番の絃が氣になるので、もう凝として居られないで間もなく後から獨りで出て行つた。そして鳥渡樂屋を見て、

直高棧敷の成るべく人目に立たない後の方にそつと坐つた。

「大切、淨瑠璃所作事、積戀雪の關の扉」と筆太に書いたのが舞臺の横に大きく張り出してあつた。お女將はすぐそれを見て、嬉しい樣なまた酷く心配な樣な變な心持ちがした。番附の式三番も其すぐ傍に少し小さく張り出してあつた。小靜の絃が堪らなく心がゝりでまた待ち遠しい樣な氣にもなつて、お女將は無意識に煙草を吸ひ吸ひして幕のあくのを待つて居た。

もう土間も大向ふも大抵一杯になつて居た。お茶屋と藝妓の名を金絲でずらりと書いた緋の緞帳の中からせり立てられる樣な賑やかな囃しの音が聞えて來た。

クラス會にて

「まア家でも惡い番頭を置いた許りにとんだ目に逢ひましたわ」と桃割れに結つたさAんは優しく口を開きました。

裁縫の机を四角に列べて、其廻りへぐるりと坐つた十三人のクラスメートの眼は、一時にさつとAさんの美しい顏へそゝがれました。

――××屋騷動！　遂此間土地の新聞に騷がしかつた其事件の女主人公！　其人の口から其話が今洩れ樣とするのですもの當然ぢやありませんか。

一體私達幹事始め誰も今日Aさんが出席なさるとは思ひませんでした。

廻り濟みになつた回章が机の上にあるのを開いて見ては、誰も「あらAさんが、被入るの？」と意外さうに云つて、誰よりも一番Aさんは期待されました。

兎もすればAさんの噂さに花が咲いて皆は思ひ〳〵にAさんを色色に想像して居ました。けれど其想像は誰のも外れた樣でした。

「什麼も遲くなりまして、皆樣暫く……」と莞爾して入室つて來たAさんは少しも何時もと變つては居ませんでした。頰の色はいつもの樣に艶々して恰好の好い眉のあたりにも曇つた色は見えませんで

した。

皆は什麼かしてAさんの心中を讀まうとする樣に、時々其横顔を眤と見詰めたり、まじ〳〵と正面から見入つたりしました。けれど誰も其話を云ひ出す人はありませんでした。わざと皆其麼事は忘れて居る樣な顔をして他愛いない事を云ひ合つては、面白さうにはしやいで居ました。其折ですもの。

「眞實にネまア」と口へ出して云ふ人もあれば、とんだ事でした、といふ樣な顔をして默つてAさんの顔を見て居る人もありました。

「新聞にも出ましたけれど、隨分今考へるとぞつとする樣ですわ」

とAさんは落着いた調子で話し始めました。皆はAさんの話が切れ

さうになるとすぐ誰か問ひを掛けました。そしてAさんの小說の樣な話は長く續きました。

「えゝもう前から仕樣のない男でしたの、兄さんもどうせ望みのないのだから只おだてゝ使へ〳〵つて云つて居ましたのよ、手が無いものですからネ——。店の品物はごまかす、集金帳は好い加減の事をする、もう幾度も〳〵其麼事は嫌な程解つて居たんですけれど、來年の春は年期が明けるんだからまア政治——番頭の名——も出世前だ〳〵なるべくなら立派に家から出して遣りたいからつてネ、不可ない〳〵つて云つても何しろもう家に九年も居るんですもの、それでまア我慢し〳〵使つて居りましたの。まさか彼麼恐しい心とは

思ひませんでしたわ……。えゝ彼の晩兄さんは宴會があつて歸りますと何時もさうした時の癖で胸元が惡い頭痛がするつて云ふものですから、何時も持藥に飲む××湯といふのを母樣が調合して茶の間の火鉢で煎じる爲に土瓶へ入れて掛けて置いたんですネ、そしてもう十時すぎなもんですから母さんも姐さんも二階へ上つて床を敷いたりして居りましたの、私は便所へ行つて、出て來ますと政治がついと茶の間から店へ行く姿を見ましたけど、まさか〳〵其麼恐しい事をしたとなど什麼して思ひませうネ、お勝手へお水飲みにでも行つて來たんだらう位ゐに思つて居ましたの、えゝ其時にストリキニーネを土瓶の中へ入れたんですのよ、なぜ其時土瓶が割れてゞも呉

れなかつたんでせう……。

茶碗へ入れた其煎じ藥を嫂さんが二階に寢て居る兄さんに飲ませますと兄さんは嫌な顏をして

「お母樣、馬鹿に今日の藥は苦いですネ」つて云つたさうですけれど……。

「其麼筈はないよ、それはお前の口の加減だらう」と母さんは別に氣にも留めないで居ましたら、一時間計り立つと兄さんは急に苦しみ出んでせう、私達はもう喫驚して大急ぎで醫者へ飛ばせ樣としてもまア其時の政治のぐづ〳〵して居るもどかしさつて無いんですの、それで鳥渡も早くといふので小さい春吉の方をやりましたけれどネ

後になればあれもこれもと思ひ當る事になりますけれど、よもや其麼事とは考へられないぢや御ざいませんか。ネ！

醫者が來ました時はもう駄目でした。まア其間の兄さんの苦しんで居るのを見て居る私達の辛さつたら……亡くなりますと體軀中へ紫色の斑點が出來ましたの、何でも藥の中毒といふので新聞にもありました樣に始めは母さんに疑がかゝりましたの。あれがもう眞實の親子でなかつたならもつとやかましかつたでせうネ。

湯棺を使はせて棺へ入れますと、ひつきりなしに少しづゝ、赤い樣な紫の樣な黑ずんだ氣味の惡い色の汁が出るんぢや御ざいませんか、それでまア棺の下へ蓆など敷きましたけれどネ、其蓆が證據に

なつて其汁のついたところを警察で大學病院へ送つてやりましたらストリキニーネの反應だといふ事が解りましたんですけれど……。

兄さんが居なくなると後は女許りでせう、それに嫂さんは實家へ遣つて呉れつて云ふものですから三十五日が濟むとすぐ東京へ遣りましたしネ（嫂さんといふのは元××家の千代香と云つて居たのでAさんのお母さんは無論親類一同皆が不服だつたのを、兄さんは無理に入なすつたとかで、籍は這入つて居なかつたさうです、三年にもなるのに、氣質は其麼人に似合はない優しかつたとAさんが云ひました。）

私と母さんきりになると弱り目につけ込んで、政治はもう好い氣

になつて好な事をするんでせう。けれど今出られたらそれこそ困ると思ふものですから我慢の出來るだけ我慢して居たんですけれど、たまには餘りだと思つて少し母さんが小言でも云ひますとそれは憤つた樣な顏して詫るどころですか一言も物なんか云つたものぢや御ざいませんの、そしていつかふいと出て終つて寢掛け時分歸つて來ましたり翌日なんかぶらりと歸つて來たりするんですの。

日常はそれは苦蟲潰した樣な不承面して居ながら時々私が帳場に坐つて居る時など、ぢろりと此方を見てはニヤリ〳〵と笑ふ其嫌さつてありませんでしたの……

あら嘘ですよ新聞には此×月養子が來るなんて出て居ましたけれ

ど……。それを聞いて政治が自暴自棄になつたんだなんて……ネ。兄さんが居なくなつてから母子は店のすぐ次の間へ寢ましたの。或る晩ひよつと夜中に眼を覺すと店との間の障子をびり〳〵とそーつと裂く音がするでせう、店は電氣を消しますから眞暗ですの、私は猫か知ら！　とは思ひましたけれど「母さん〳〵」と小さい聲で呼びますと、それきり音がしなくなりました。けれど別に私は氣にも止めないで母さんにも云ひませんでしたら、それから四五日立つた晩に今度は母さんが其音を聞いたんですの、母さんはついと起きて店の障子を明けると、何か動いたものが暗い中にも見えたんですつて、それで急がしく電燈の螺旋を返すと、何も居なくて唯政治が寢

返りを打つ様な風をして居たさうです、ぢや猫でも障子を破るのか知らと母さんもさう思ひながら何の氣なしに政治の枕元を見ると小形なナイフが落ちて居たつて云ふぢやありませんか、母さんはハッとしたさうですけれど其まゝ床の中に這入つて朝まで眠らなかつたさうです。そして翌日母さんはしんみりと云つて聞かせる樣に昨晩の事を聞きましたけれど、またいつもの樣に一言も、それこそウンともスーとも云ひませんでしたの。

それから二三日して私が帳場に居ますと政治は用から歸つて來て店の先へ坐りましたから、

「政治、お前は私達を什麼か仕樣とするのかえ？」と靜かになじる

樣に聞きますと始めは默つて居ましたけれど、

「え、政治！」と幾度も聞いたものですから、

「へ……別に什麼しやうとも思ひやしませんや、唯喫驚させて上げたのよ、新聞ではさうして其切り破つた間から魔睡劑の附いた棒を入れて私や母を魔睡させて私を什麼かしやうとする積りだつたらうと云ふ樣に書いてありましたけれど、まアもしも其麼積りでしたら……思つてもぞつとしますわ。

まさか其麼事とは思ひもよりませんでしたけれど、何だか、氣味が惡いので、早く出して終つた方が好い〳〵と云ひながらも一日一

日と延びて終ひましてネ、それから何でも二週間許り立つた忘れもしません雨の降る嫌な晩でした。其頃はもう癖の様になつて夜幾度となく眼を醒しますの、其晩も二三度目を醒してまた三時頃ひよつと眼をあくとバチリ〳〵といふ音が店の方でするでせう、それから私は喫驚して床の上へ起き上つて障子の塡硝子から覗いて見ますと北の陳列棚と帳場の下から火が出て居るぢやありませんか。「母さん火事！」と大さな聲で母さんを呼び起す、すぐ私は裏から飛び出して、もう夢中で「小父さん來て下さい火事です〳〵」とお隣りを起しましたの、まア其時政治はもうちやんと逃げる仕度をして居ましたつて〃

放火と見たお隣の小父さんはすぐ政治をぐつと捉へて終ひなすつたの、えゝえ、もう政治が不可ない事など近所中皆知つて居りますわ。

火はすぐ消えましたさうですの。矢張り鹽酸加里に何か混ぜて政治が放火しましたのよ、えゝ商業柄ですから好な事が出來ますわネすぐ報らせましたので警察からは巡査が二人來ましてネ、すぐ政治をつれて行かうとしますと、政治はもうちやんと度胸を据ゑて、鳥渡着物を着變へて來るからつて、二階へ上ると間もなく下りて來て今度は勝手へ水を飲みに行きましたから母さんが「何を彼方此方して居るんだえ！」と勝手の障子際に立つて居て云ひますと、水を飲

んで終つて默つて出て來て、どんと思ひきつて母さんの胸を打つて
つき轉ばすでせう、私は喫驚してあれ！と大きな聲を出したもんで
すからすぐ警官が靴のまゝ上つて來てすぐ連れて行きました。
母さんはぢきに治りましたけれど、まア其の時の喫驚しましたつ
て……。
警察へ行て少し立つと政治は急に苦しみ出したので什麼した〳〵
と大騒ぎして聞きましたらストリキニーネを飲んだつて云つたさう
です。えゝもう是までと思つて彼の時勝手で飲んだんですのよ。
それッといふのですぐ病院へ入れて、毒を吐かせたさうですけれ
どネ、あとで犯罪が解つてから院長さんが「なぜ彼の時も少し澤山

飲まなかつた」つて笑ひながら仰有つたんですつて。
其時色々聞き合せて見ると、兄さんの苦しみ方と政治のとがそつ
くりなんでせう、はて！　と思ふともうはつと思ひ當る事許りなん
ですね。それから警察の調べが嚴重になつて、確實な證據が彼方か
らも此方からも上つて來るんですのに、先達つての一回目の公判の
時は、もうすべてを否認して居るんでせう。私憎らしくて〳〵、も
う什麼して呉れゝば好いがと思ひましたわ公判の時餘程傍聽に行か
うと思ひましたけれど却つて不可ないからつて云はれて止しました
けれど、甚麼顏して居るかと思ひましてね……。えゝ明後日二回の
公判ですの、よく昔の探偵小說なんかにある樣に、私什麼かして隱

れた處から大きな證據を見出して、もうぐうの根も出ない樣にして遣りたいと始終思つて居るんですけれど……。兄さんの敵、家の敵ですもの……」

靜かに語り終つたAさんは、凝と瞳を落して俯向きました。

ほつとして始めてAさんから瞳を離した私達は、何だか體軀が堅くなつた樣な氣がしました。皆の前に列べられた番茶は、茶色に冷えきつて居ました。

母校の作法室なんです。床の間には誰やらの楠公櫻井の驛の軸が掛つて居ます。敎育勅語と勤儉勅語の額が北の壁に、卒業生合作の歌や畫の額が周圍の壁に三つ四つ掛かつて、南の窓際には、去年私

達が記念に植ゑた彼の芭蕉が、青々と大きく繁つて居ます。

恐しい暗黑の渦卷の中に漂よひながら、遂に危くも逃れ得た其人から、此一條の物語りを聞くには、あまりに周圍の空氣がかけ離れて居るではありませんか。

私の胸には、何か斯う、云ふに云はれない强い或る物が殘されました。

本郷の兄

前略――突然ながら至急御面談申上げたき用件出來致し候間、御老體御足勞樣ながら此狀着次第四五日御滯在の御積りにも御上京下され度、伏して願ひ上げ候。

母上樣

健二

珍らしく江戸川の卷紙へ何時もより少し丁寧に書いてある此手紙を受け取つた翌朝、母のお常は不安らしい落着きのない顏をして、矢張り同じ樣な心持ちをあり〳〵と瞳の色に見せて居る娘のお芳に送られて氣づかはしさうなおど〳〵した風をして出發て行つた。

「お母さん、甚麼話かお聞きなすつたらすぐ知らせてお呉れなすつてネ、一言で好う御ざんすから、私氣になつてもう……眞實にネ」

と、お芳は母が車に乘らうとする時またくどく念をついた。そして一人になると猶更兄の事が氣になつて、もう何をする氣にもなれなかつた。

夕方近所のお久米さんといふお世辭の好い婆さんが宿りに來たけ

れど、何時もの様に其相手になるのが堪らなく嫌だつた。

至急御面談申上げたき用件？……終ひにはもういら〳〵する程其言葉が何時までもつき纏つて忘れられなかつた。

「屹度東京で嫁でも貰ふと云ふんだらうよ」と云つた母の言葉が一番當つて居るらしくは思はれるけれど、確かにさうだとは什麼しても思ふ事が出來ないで、兄の周圍に起りさうな事はすべて色々に思つて見た。隨分暗い嫌な事も考へて見た。そして身震ひする程ぞつとした。

次の日の夕方、兄の亂雜な手筆で、母の安着を簡單に知らせて來た。お芳はそれが何となく物たらなかつた。

それからは郵便！　といふ聲の度にはつとしては、母からではないか知らと思つて胸ををどらせて居たけれどそれから四日立つても五日立つても母からは葉書一枚來なかつた。お芳の胸は暗い色が漂よひ始めた。

彼麼に念を押したのに知らせて下さらない處を見れば什麼せ好い事ぢやない、もしか〳〵したら……と什麼しても、思ひたくない樣な事許り考へられた。

時雨の樣な雨が朝から降つて居て、何となく心細い。秋らしい感じのする日暮れ方である。

――母上御不在にて何かとお困りの事と御推察仕候、母上も暫

くぶりの御上京に候へば毎日少し宛處々御案内など致し思ひがけなく御歸宅延引仕り申譯御座無く候、就ては明後二十日二番發にて御歸宅の事と相成り候間一寸御通知申上げ候、御許も來月半ば頃は命の洗濯に御出京なさるべく候、匆々。

と先の摺れたペンで書いた此葉書が格子戸の間からばさりと落ちた。

お芳はいくらか心が明るくなつた樣な氣がした。別に變つた事もないらしい葉書の文句を幾度も讀み返して見て、さう大した事ではないだらうと獨で定めて、少しは輕い心持になつたけれど母の歸りが堪らなく待ち遠しかつた。

次の日も細い雨が歇まなかつた。お芳は幾度か時計を見ながらそこらを氣持ちよくかたづけた。晝間は居ないお久米婆さんも朝から何處へも行かないで待つて居た。

「什麼やら雨が晴れさうで御座んすよ、なつちよも晴れて呉れると好う御座んすにネ」とお久米婆さんが格子戸を開けて外を氣づかはしさうに見ながら云つた頃から、お芳は車の音に氣をつけて居た。

さうか知ら？　と思ふ車が幾臺も通り越した。其度にお芳は時計を見上げて什麼したんだらう？　と輕く頸を傾げた、終ひには取次のところに腰掛けて待つて居た。お久米さんの云つた樣に雨は泣き泣き晴つた。雨雲がまだ低く垂れて居るので晴々はしないけれど、

水蒸氣を含んだシットリした空氣が雨上りの生々したすべてのものを包んで、からつとした日より却つてお芳には氣持ち好く思はれた。石の綺麗に洗はれた少し蒲鉾なりになつた道を、傘をつぼめて高い足駄を音させて行く幾人かの人を、お芳は眤と見て居たけれど、待つて居るその母の車は家の前へ止まらなかつた。

「お久米さん什麼したんでせうね、汽車はもう先刻に着いて居る筈だのに」とお芳はついと立つて勝手で何かして居るお久米さんのところへ行つて噂して居ると、

「お歸り！」と低い車夫の聲がして車の音が止まつた。

「まアさんざ今まで取次に居たのに」とお芳は言譯らしく口惜しさ

うに云ひながら急がしく驅けて出た。

お久米婆さんも濡れ手を拭き〳〵そは〳〵と迎へに出た。大きな鞄を車夫が取るのを待ち遠しさうにして下りた母の顏は別に變つて居なかつた。

「什麼もお久米さん留在中は御世話さんでした」ともう何より先に云つた母の顏には、何時も斯うした時と同じ樣な晴やかな微笑みが見えた。

お久米婆さんはのべつにお世辭を列べ始めた。心持ちの好い人なので何時もはそれがさう氣にもならないけれど、お芳は時々後の方で嫌な顏をして、もう好い加減に歸れば好いと思つて居た。

母のお常もさう思つて居るらしいけれど、少しも其麼風は見せないで、好く其相手になつては、幾度も幾度も留守中の禮を繰り返して居た。そして

「お久米さん、恁麼物だけれどまた絆纏にでもしてお呉れなすつて」と新聞紙に包んだ反物らしい物を鞄から出して遣ると、

「まあ其麼御丁寧な事をしてお呉れなすつちあ」と表面許りさも入らない樣な口振りで云つて居たけれど、其内に、

「左樣で御座んすか、ぢやお叩頭なしに頂戴致します。什麼も有難う御座いました」と兩手で大事さうに丁寧に押し戴くと、間もなく幾つか幾つか頭を下げて歸つて行つた。

お芳はほっとした。そしてそれと同時に急に胸が小さく波立つた。

「まアお母さん彼麼に私が云つたのになぜ手紙を下さらないの？」と元の座へ坐るとお芳は眞先に恨む樣に聞いた。

「あゝ惡かつたよ、私や明日は歸らう〳〵と毎日思つて居たものだからネ、歸つてとつくり話した方が好いと思つて」と落着いた聲で云つて俯向いた母の顏が、何か思ひ出したらしく急に曇つた。お芳ははっとした。

「そして兄さんが什麼なすつたつて云ふんですの！」

とお芳は待ちきつて居た事を、わざと落着いて靜かに聞いた。

「えゝ？……」と云つてお常は少し口籠つた。「恁麼事たあ私は思はなかつたよ」と云つてまた眤と俯向いた。お芳は自分の事か何かの様に胸を騒がせて默つて居た。

「子供が出來たんだつてさ、矢張り山下館に居る女に……」とお常は低い聲で云つた。

「まア」と云つたきり、お芳は眤とお常の曇つた顏を見上げてすぐ俯向いた。何とも云ひ様のない、今までに覺えのない變な氣持ちがした。

「それでもう七月位になつて居るので何とかしなくてはといふ話なんだよ」とお常は口重さうに矢張り沈んだ低い聲で云つた。

「それで兄さんは什麼なさるお積りなんです？」とお芳は何か恐しい事でも聞く様におど〳〵しながらちらとお常の顏を見て云つた。

「兄さんは其子供だけ引き取つて私に育てゝ呉れつて云ふんだがネ……」

「お母さん、それで御承知なすつたの？」とお芳はあわたゞしく言葉までせか〳〵して聞いた。

「あゝ、だつてお前仕方がないもの」とお常は苦しい様な聲で云つた。そして

「さうなるとお前にもまた大變御苦勞掛けなくつちあならないがネ、どうかまあ兄さんを恨まないで何かの因果と諦めてお呉れよ、

武兄さんが彼麼様だから健二もなか〳〵大抵ぢやないから」としみじみお芳をなだめる様に云つた。お芳は何となく胸が迫つて眤と俯向いた。

「武兄さんと違つてわゝして私達にも優しい様だから矢張り不可ないんだネ、惜しい事をした」

とお常は一寸もお芳に強い反抗を起させる様なことを云はなかつたお芳もまた平常の優しい兄の仕打ちを思ふと、さう堪らない程いらいらする心持ちになれなかつたけれど、胸の中は色々の想ひがゴチャ〳〵にこんがらかつて居た。終ひには何だか他人の事の様な氣にもなつた。

「お嫁ひなさる様な女ぢやないんですか」とお芳は自分ながらはつとする様な思ひきつたことをわざと落着いて聞いて見た。

「わゝ思はしくないんだよ、それに兄さんももう二三年勉強したいと云ふから」とお常は矢張り調子ハ低い聲で云つてそれから少しづつ句切つては、お芳の胸を色々にこんがらがらせて行つた。そして

「武兄さんにはまア隱せる處まで隱して置かう」と云つた。それを聞くとお芳は急に何處までもお母さんと一緒に兄さんを護つて遣りたいと思つた。けれどすぐまた彼の山下館の二階で思ふまゝに放縱な生活をして居る此頃の兄を想像して、堪らなく暗い嫌な氣持がした。そして弱々しく折れて居る母の仕打ちがもどかしく思はれた。

けれどまたよく考へるとさうしなければならない母が氣の毒にもなつた。母娘は何時までもさうして凝ど坐つて居た。少し沈默が續くと母娘は各々に矢張り同じ事を思ふて居た。

外はまた暗くなつて、音のしない樣にそつと雨が降つて居た。

暖簾縫

中庭の北を緣傳ひに行く新座敷の十疊には、綠町の伯母も新宅の叔母も、其からぐるり下しの桃割れに結つた從妹のお時ちやんも、まだ二三人が不揃へに圓くなつて、一度入れ變へたお茶を話の合ひ間〳〵に思ひ出した樣に飲んで居た。

水引きの花があつさりと投入れに挿してある床柱の前には紺の色の新らしい暖簾の布が厚く重ねてあつた、お艶は皆より少し離れて敷居際に、何となく手持無沙汰さうに坐つて居た。そして時々皆の

茶碗をのぞく樣に見て、一つでも明いたのがあるとすぐ、急須を取つてそは〳〵した樣な、それで居てわざと落着いた風をしてお茶を注いだ。

九月半ばの朝の空氣はしつとり落着て氣持か好かつた、裏庭の眞中にある大きな松の木を通した日が、座敷の中を綠色に明るくして居た。

お時ちやんは一寸した事にも面白さうに笑て、始終晴やかな顏をして居た。それがお艶は何となく嬉しく思はれて、自分も一緒になつて優しく莞爾して居た。

綠町の伯母は時々まじ〳〵とお艶の横顏を見た。そしては終ひに

恍惚した樣に細い眼をして、お艶が一寸でも此方を見るとすぐ莞爾と柔かく笑つた。お艶は其度に困つた樣な風をして笑ひながら俯向いた。

お銀――お艶の母――が大きな絲卷きに卷いた黑い絲と、好く切れさうな斷ちもの剪を持つて、そは〳〵して這入つて來た。皆はせき立てられた樣に急がしく茶碗を端へかたづけた。

「まアまだ宜しう御ざいますのに御ゆつくり什麼ぞ」とお銀は何だか惡い事をした樣な氣がして氣の毒さうに云つた。

「もう澤山戴きました。餘りゆつくりして居て夕方急がしいと困りますから」と綠町の伯母が云ふと、皆も眞實にといふ樣な顏をした。

お時ちやんは自分の後にあつた暖簾の反物を重さうに眞中へ出した。お銀は輕く會釋してそれをずつと長く廣げた。紺の強い香がばつと座敷中へ廣がつて、すつきりした明るい空氣に溶けあつた。

紺地の中に「高島屋」といふ字と司と大きく染め脫いたのが半分に切れたのとが、眞白に浮き出て見えた。それを皆は眤と見て居た。

お銀は馴れた手つきで小暖簾から裁ち始めた。皆はもう小ちやぼの針に紺の三子絲を通して待つて居た。

お艶は何だか氣が樂になつた樣な氣がして、重ねてあつた茶碗を皆茶盆の上へのせて、輕くなつた湯わかしと一緒に茶の間の方へ持

て行つた。そして二つ三つ小さな絲卷を持つて來て、大きな絲卷から分けたり、まだ殘つて居る長暖簾を斷つ許りに見積りをしたりした。

「此暖簾を掛ける時分にはもう高島屋のお艶ちやんぢやなくて高島屋の若いお內儀さんですネ」と綠町の伯母は誰に云ふでもなく云つてお艶の顏をちよつと見て笑つた。お艶は俯向いたまゝ顏を赤くした。

「もう一月しかないんですもの、まご〳〵して居ればすぐですよ」と新宅の叔母は別にそれに受け答へをする積りでもなく思つた事を云つた。

「まあどんなに好いお嫁様におなりなさるでせう」と丸髷を粋に結つた、割合に見たところの好いおすいさんといふ高島屋の一番番頭の内儀さんが、眞實にさう思つて居るらしく落着いた云ひ方をした。

「まだからつきり子供見た様ですけれどネ、他家へ出すんぢやありませんから」とお銀は云ひわけらしい事を判然した何となく嬉しさうな聲で云つた。

「えゝ〳〵掛けがへの無い娘ですもの早く定りをつけなくちやあ……一寸も早いことは有ませんに」と新宅の叔母がすぐに云つた。

お艶は什麼すれば好か困つた様な風をして、布の端を揃へて引張つて見たり、上から撫でゝ見たりして居た。お茶の時から其麼事を

云はれやしないかと思つてはら〳〵して居たのを云ひさうだつた緣町の伯母が何も云はなかつたのではつとして居たのに、お艶はやだ何か云はれやしないかと思つて、胸をおど〳〵させて居た。と皆はそれきり少しの間默つて居た。お艶はほつとしたけれど、何處かに斯う物たらない様な氣持ちが少しくして居た。

「艶ちやん一寸其絲卷を頂戴」と緣町の伯母が云つた、それをお艶は何か云はれるのかと思つてはつとした。

「さあ、では皆様お願ひ申します」とお銀は裁ち切つたのを皆前へ押しやる様にして云つた。

「私達は皆つなぎ合せるから艶ちやんと時ちやんは緣を絎けて頂戴

ネ」と新宅の叔母が云つた。

「お時ちやんさア お手並を見せて下さいよ、其かはり晩にはどつさり御馳走をして上げますから」とお銀は冗談らしい口振りで笑ひながら云つた、お時ちやんは默つて笑つて居た。

皆針が澁さうに時々顔を顰めては絲をぬいて、せつせと縫ひ始めた。

「伯母さんなぜ暖簾は一日に縫つて終はなければ不可ませんの？」

とお時ちやんは隣に居た綠町の伯母に小さい聲で聞いた。

「まア店の名が切れるつて云ふ理由なんでせうよ、それに今日のは格別御婚禮の日から使ふんだからネ、一つまあ時ちやんにみつゝりやつて貰はなくちあア、其かはり又時ちやんがお嫁に行く時は艶さんがいくらも御仕度のお手傳ひして下さるから、ねえ？」と眼の優しい伯母はお艶の顔を見て聞く樣に云つた。

お艶は手先から眼をあげて小さく頷いて莞爾した。お時ちやんは一寸赤くなつて矢張り默つて笑つた。

皆はまた默つて一生懸命針を運ばせて居た。何も別に考へる事のない皆の胸は平だつた。唯お艶の小さい胸許りが時々波立つて、獨りでぽーつと頰が赤くなつたりした。

復讐

「小夏さん――小夏姐さん……」と何處か遠い處で呼ぶ樣な氣がして、小夏はふいと眼を醒した。ともうそれを待ちきつて居た樣にすぐ、昨晩の事がさま〳〵と判然浮んで來て、小夏ははら〳〵とした。

くいと頭をもたげて邊りを見廻したけれど誰も居なかつた。只向ふの障子際にお雛妓の光代がさも疲れきつた樣に、黄縞の搔卷から白いふつくりした顏を出してぐつすりと氣持ち好ささうに寢て居る

許りだつた。

緣の障子には欄干を辷つた明るい日が、強く一杯にさして居た。下階からは調子の高い笑ひ聲が、朝のすつきりした空氣をゆるがせて、賑やかに聞えたけれど、小夏はいつもの樣に忙がしさうに起きやうともしなかつた。

宿酔でぐら〳〵する頭を、いら〳〵した樣に强く振つて見て、濃い恰好の好い眉を顰めるとまたがくりと俯伏した。そして、誰が今夜行くものか、其麼にしたつて行きやしないわ、いつも〳〵下手に出て居れば好い氣になつて餘りな〳〵、といら〳〵するこんがらかつた胸の中で强く〳〵、けれども低い小さい聲で叫んだ。

下階の掛け時計が大きく八時を打つた。

小夏は何か思ひ返した様にくいと起きた。そして何時もと同じ様な顔をして下階へ行つた。

「おや小夏さん、よく寢てネ最も昨晩遲かつたもの」と姐の松吉が優しく云ふと「え、隨分お寢坊しちまつて」と小夏は何時もの様に柔かく莞爾した。

お晝頃皆と一緒にお德さんの處へ髪を結ひに行く時も小夏は大きな聲で笑つたり他愛ない事を喋つたりしてわざとはしやいで居た。そして夕方お湯から歸ると光代のお化粧を直してやつたり、帶を好い恰好に結んでやつたりして、自分も皆と同じ揃ひの黑紋付を着た。

けれど皆の樣に明るい街を通つて××座へは行かなかつた。紅い緒の草履を履いたまゝ皆の後から默つて林家を出て、暗い裏道からそつと福壽樓へ這入つた。そして昨晩宴會で逢つた馴染の竹下に電話を掛けた。

竹下は小夏の顏を見るとすぐ、

「今夜はお浚ぢやないか」と聞いた。

「お浚だつて好いぢやありませんか妾なんか用がないのですもの」と小夏は何でもない樣に投げる樣な云ひ方をした。

「何故？　兩國遊山船か何かするんぢやないか」と竹下は不思議さうな顏をして小夏を見た。

「妾には無理だつて勝江さんが云ふんですもの、だから妾彼の人に頼んだのよ、自分でするが好いわ、いくら妾が馬鹿だつて餘りだわ彼麼宴席で自分に恥をかゝせて……――なんで行くものですか」と小夏は昨晩の事を思ひ出して、もう抑へきれない樣にいら〳〵して云つた。

「あゝ昨晩の彼麼事位氣に掛けて居るのかえ？　僕達は何とも思つちや居ないのに」と竹下は何時にない小夏のぶり〳〵しい強い仕打ちを氣づかはしさうに見て云つた。そして、

「それで眞實に行かないのかえ？」と念を押す樣に聞いて見た。

「誰が行くものですか、何時も優しく出て居れば好い氣になつて」

と小夏は力のある低い聲で、強く云ひ切つた。

「たまには思ひきつた事もして見るさ」と竹下は氣づかひながらも冗談の樣に斯う云つて見た。

そして二人は離れの中座敷で默つて飲んだ。

小夏は一寸も何時もの樣に恍惚した好い眼で優しく莞爾などしなかつた。いら〳〵した胸を無理に抑へつける樣にぐい〳〵飲んで許り居た。

××座では常盤津のお浚ひ式三番から始まつて、おこま才三の白木屋が終る頃まで、誰も小夏の居ないのに氣づかなかつた。三好家の勝江さへも、それ程昨晩の事を氣にも留めて居なかつた。

「あら自家の小夏姐さんは！　もうぢきですのに、小夏姐さ――ん」と光代が急に思ひ出した様にそこいらを見つけて歩いた。

「誰！　小夏さん？　さう云へばまだ一寸も見えないぢやないの」と急に皆は騒ぎ出した。勝江はハッとしたけれど、わざと知らない顔をして居た。散々見附けあぐんだ光代が、福壽樓の薄暗いよく拭きぬいてある廊下を幾廻りかして、離れへと小走りにバタ〳〵と行つた時、小夏は矢張り默つて飲んで居た。そして其草履の小さい音を聞くとハッとした。

「あら姐さん什麼なすつて？　恁麼處に、まあ甚麼に見つけたんだが、もうすぐですのよ、さア早く被入しつて頂戴よ」と光代は竹下へ

挨拶も忘れて、あわたゞしさうに小夏の傍へ踞んで、其袖を握つた。

「什麼もしやしないのよ、光ちやんあの三好家の勝江姐さんにネ、自家の小夏姐さんが什麼ぞお願ひ申すつて、云ひましたつてさう云つて下さいな」と小夏はわざと落ちついて、赤く潤んだ眼でチラリと光代を見て云つた。

「あら什麼なすつたのよ其麼事……」と光代は喫驚して小夏の横顔を氣づかはしさうに見上げた。

「好いのよ何でも……早く行つてさう云つて頂戴つてば」と小夏は思ひきつて手強く云つた。

「だつて皆が待つて居るんですもの困るわ」と光代は何時もにない

小夏の荒々しい樣子におど〳〵しながら斯う云つて、困つた樣な泣きたい樣な顏してまだもじ〳〵して居た。とまた遠くから急がしさうな足音がした。小夏は默つて俯向いて居た。

「まア小夏さん什麼したの！　恁麼處に」と松吉が大きな聲で云ひながら這入つて來た。

「什麼もしやしませんわ、私の變りは勝江さんがやつて呉れるでせう、上手い人がした方が好いぢやありませんか」と小夏はチラと松吉の顏を見上げて捨てる樣に云ふと、それきりまた俯向いて默つて終つた。

「まア何云つて居るの？　先刻がたまで機嫌よくして居たぢやありませんか、あゝ昨晩の事を氣にかけて居るので！　小夏さんの氣の小さいのにも困つたわね、其麼事で藝妓か勤まるものですかネ？　竹下樣、さア〳〵行きませうよ」と松吉はわざとはづんだ調子で、けれど何處となく優しみのある聲で云つた。そしてよく今まで默つて知らない顏をして居た小夏の我慢强いのに屹驚した。「だつて昨晩許りぢや無いんですもの……」と俯向いたまゝ云つた。小夏の聲は少し潤んで小さかつた。

光代はよく理由が解らないので唯氣づかはしさうに小夏の顏を見て默つて居た。

「好いぢやありませんか彼麼人何て云つたつて餘計なお世話だわ、

さうしたら猶思ひきつて吃驚する様に語つておやりなさいよ、ネ？
さア行きませう、お師匠様に濟まないぢやありませんか」と松吉は小さい子をなだめる様に云つて小夏の袖を握つた。
「行くが好いよ姉さんが恁麼に云ふんだから」と竹下はどうせ小夏には思ひきつた仕打ちは出來得ないのだと思つて何となく物たりない様な、けれど可憐しい様な氣がして眞直な普通の事を云つた。
小夏は無理に松吉の手を拂はうともしないで、默つて薄暗い廊下を二人に連られて行つた。そして自分ながら餘りに意氣地がない、餘り弱い！
と思ふといら〳〵した胸の中は猶更かきむしりたい様な氣持がした。竹下は矢張り小夏は弱い女だと思ひながら默つて其後姿を見送つた。

「兩國遊山船」と大きく太く書いた番附が張り出された時、金屏風の前に列んだ五つの顏の中に、小夏の顏許りが目立つて赤かつた。そして其大きな潤みを持つた黑い瞳には、或るものに勝ち得やうとする强い重い輝きが見えて居た。抑へつける様にぢつと沈めた胸の中には、復讐、小さな復讐！　と其言葉が絶えず强く小さく叫びを立てゝ居た。
ふつくりと生え際の濃い額には、もうしつとりと汗が染じんで居た。

不安

「美遊龜の春ちやんが新橋の何某とか云ふ藝妓屋へ養女はれるんですつて」

「さうだつて、矢張りお座敷へ出るんでせうて、可愛い好い妓になるでせうよネ」

恁麽噂が近所界隈でされる頃、もうお春の籍は梅の家の養女になつて居た。

裏庭の大きな泰山木の陰の無花果が、枯木の様な枝先から小さな

葉をゴチャ〳〵と澤山出すと、すぐ青い可愛い實が幾つか出た頃から、お春は何かに唆り立てられた様に急に踊と三味線の稽古に身を入れ出した。

「田舍者だから藝が無いと云はれちや第一私が笑はれるからね」と叔母のお須恵は口癖の様に云つてうるさい程よく世話を燒いた。

其日もお春は朝湯から歸ると、半襟のかゝつた大柄な銘仙の袷の上へ赤い博多の帶を小さく貝の口に結んだまゝ、長唄の稽古本を二三冊バサリと投げる様に置いて、茶の間の椽近くへ撥を持つて坐つた。

ふつくりした唐人髷の緋鹿の子の手柄が、湯上りの黑く濡れた廻

りの毛に似合つて美しかつた。

――牡丹の花に舞ひ遊ぶ胡蝶に心柔ぎて――

調子を二上りにすると思ひついた樣にふいと連獅子の途中半から小さい聲で唄ひながら無雜作に輕く少し早目に彈き始した、好い加減表紙の皺くちやになつて居る稽古本は開かれないで其儘になつて居た。

蠟を塗つた樣な艶を持つた若々しい八ッ手の葉を通して、朝の日が緣から疊の上まで明くさして居るけれども、花柳の街はまだ夜明け頃の樣に靜かであつた、女中のお富美もお信もやつと顏を洗つた許りで、まだ眠りたりない樣な顏をして座敷や庭の掃除をして居た。

「おや春ちやん今日は馬鹿にお精が出るのネ」とお須惠は大縞の寢卷きのまゝ、櫛卷きの鬢をとかしながら、晴れた顏をして這入つた來た。

お春は唄と撥の手を一緒に止めて莞爾した。

「勸進帳、賤機帶、淺妻船……さう今日にまア勸進帳をしつかり堅めてお終ひなさいよ、ネ？」とお須惠は其處にあつた稽古本をずらして表紙の字を見て云つた。

「妾彈くから叔母さん唄つて下さいな？」とお春は笑ひながら冗談の樣に云つた。

「彼麼事云つて、私が唄つたんぢや何にもなりやしないわ」とお須

惠も機嫌の好い顔をして笑つた。

「だつて私もう終ひになると咽喉が苦しくなるんですもの」と云ひながらお春は爪彈きで調子を直して居た。

「まア斯ういふちやんとしたものをしつかりやつて置かないとネ、細かいものは何時でも出來るから」とお須惠は違ひ棚の極にあつた長い煙管と煙草入れを引き寄せながら云つた。

「始めの方は好いけれど……鎧に添ひし袖枕のあたりからまだかたまつて居ない樣だから」と云つてお須惠はマッチで火をつけながらゆつくりと好まさうに煙草を呑み始めた。

「ぢや、人目の關のやる瀬なや、のあたりから叔母樣一緒に唄つて

頂戴なネ？」と可愛く一寸頸を傾げてすぐ、旅の衣は篠懸の〳〵露けき袖や……と張りのある好い聲で唄ひ出した、絃もよくそれに合つた。

お惠須は曇りのない顔をして其撥の手と細かく動く左の手とを眺と見て居た。其内に小さい聲で調子をとり始めた。

——元より勸進帳のあらばこそ笈の中より——と大へん調子がついて來た、お須惠も何時か釣り込まれて一生懸命に聲をかけて居ると、

「御免なさい、お女將さんお宅？」と晴々した松三好のお女將の聲がした。

「おやお女將さん大へんお早くえゝ被在いますよ、もう春ちやんのお稽古ですの」と輕く挨拶するお信の聲も表庭でした。

「おや松三好のお女將さんが……」とお須惠は待つて居た樣についと立つた。お春もひたりと止めた。何となく調子拔けのした樣な變な氣持ちがした。

「お春ちやんなか〳〵お精が出ますのネ、構はずなさいましよ」と松三好のお女將はお須惠の後から這入つて來て、お春の後姿を見るとすぐ調子の輕い聲で云つた。

「あら、女將さん被入いまし」とお春はくるりと後を向いて黃ろい高い聲で云つて輕く頭を下げた。

「あの十日頃に妓を見に來るつて今手紙が來ましたの」とお女將は明るい敷居際へ坐るとすぐ斯う云つた。

「あらさうですか什麼も色々御世話樣、十日つて云ふと……今日は四日ですネ」とお須惠は一寸指を折つて見た。そして

「春ちやんみつしりお稽古しなけりや駄目ですよ」と別に强い聲でもなく、横に居るお春を振り返つて云つた。

「お女將さん大丈夫、性が好いんですもの、そして此容貌なんだから……、新橋あたりで磨き上げたらまア甚麼に好い妓になるでせう、梅の家のお女將も幸せですわ恁麼好い娘が養女るんだから」と松三好のお女將は眤とお春の横顏を見て羨しさうに云つた。

「何だかまだからつきしものになつて居ないんですからネ」と云ひながらもお須恵は何となく嬉しさうな顔をして居た。

「何處で逢はせませう自家でも好いけれど、妓が大勢居てうるさいし、一層お宅ぢや如何、お春ちやんも其方が氣が落ちついて居て好いかも知れませんよ」とお女將はお須恵の吸ひつけて呉れた煙草を一寸會釋してゆるく吸ひながら云つた。

「えゝ私も其方が好いと思つて居ましたの」とお須恵はすぐ頷いた。

「誰でも彼の時は氣がおど〳〵すると見えましてネ、私なんかよく何か彈せても、終ひには氣の毒になつて好い加減で止めさせて終ふ事があるんですよ、餘程氣のしつかりした馴れた女でなくちやとて

も平氣な顔をして思ひきつては彈かれないやうですネ、踊りも矢張りさうですよ」とお女將はまた續けて云つた。

お春は何となく不安になつて來た。

もし間違つたら、お女將さんは大抵彈かせるものは定つて居るといふけれど若し私のよく知らないものなんか彈かせられたらと思ふと、極優しいといふ其梅の家のお女將が意地の惡い何だか其麼事をしさうに思はれて、泣きたい樣な心持ちになつた。

亡母樣の被在した新橋、初代姐さんのよく話して呉れる彼の東京の新橋、私は行きたいんだけれども……と思ふともう其時が心配で堪らなくなつて來た。

「お春ちやん好く彈かうなんて思はないでネ、何でも平常と同じつもりで思ひきつてお彈きなさいよ」とお女將は幾度も云つて歸つた、お春は唯笑つて頷いて居たけれど、小さい胸の中はもうおど〳〵して不安で不安で堪らなかつた。

結納

お雪はうつとりと障子の縁にもたれて、座敷の敷居際へ坐つた。どうしても昨晩の事が夢の樣な氣がしてならなかつた。けれどそつと床の間を振返ると、其處には決して夢でない事を證據立てる樣に金銀と紅白の水引が美しく入り亂れて、綺麗に蝶花形に結ばれた結納の贈り物が、六尺の大床に載せられない程列べてあつた。怖いものでも見る樣にちらとそれを見たお雪の胸は、今更の樣に大きく波立つた。ぽーつと淡く紅がさした美しい面には可憐しい羞恥がふ

くまれて、いつも何か見詰めるに恍惚と細い眼をする癖のある其大きな瞳には、限りない望みの色が輝いて居た。

荒い銘仙の袷の袖を膝に疊んで見るともなく垣根に咲いた卯の花を見詰めて居る雪江の胸は、春の夜の様な柔かいふつくりとしたスキートなるものであつた。

昨日店の長暖簾も小暖簾も新らしいのに變へられて、「××屋呉服店」と襟に染め抜いた、紺の色の好い印絆纏を着た出入の男や店の者が、所在なささうに長い框にずらりと腰掛けて居た頃、お雪は何時もよりぐつと根の高い島田に結つて、派手な紋お召の二枚袷を、髪結ひのお奈美に着せて貰つて居た。母のお仲は嬉しさうな顔をし

て、默つてそれを見て居た。さうして二筋三筋出て居た帶の中で、一番着物に寫る様なのをすーつと長く廣げて、手の方を二つに折つてお奈美に渡した。

「お太鼓に致しませうネ」とお奈美は、何時も雪江が半襟のかゝつた着物に大形の前掛けをかけて居るのを思つて、お仲の氣に合ふ様な事を云つて見た。

「えゝ其方が溫順しくてネ」とお仲は大きく頷いた。お奈美は何か好い事でもした様な氣がして、そは〳〵しながら甲斐々々しく雪江の帶を締めた。

上の方へきちんと高く結んだ雪江の姿をお奈美はさも惚れ〴〵し

た様に前から見後から眺めした。そして髪結ひらしい口調で無暗と
お世辭を云つた。凝と坐つたまゝ娘の美しさを見上げて居たお仲は、
お世辭と知りながらも柔かく微笑んで居た。そして
「此頃まで唐人髷に結つて居たものが、もうぢき丸髷になるんです
ネ」と滿足さうに云つた。おなみは猶更お仲の心持に合ふ樣なこと
を上すべりのした聲で止度なくしやべつた。いつもは輕い調子で嫌
味なくはしやぐお雪は、今日は眤と俯向いて恥しさうにして居た。
廣い勝手には手傳ひの人が大勢大きな聲で笑ひながら働いて居
た。大抵の人は手傳ひといふのは名許りで皆東京の大店から來ると
いふ其結納が見たい許りであつた。

上野二番發の汽車が着く時分になると家の中は急にそは〳〵しだ
した。拭きぬいた長い廊下を急がしさうに行くもの、藏の中から大
きな聲で何か聞く者、其騷しい中に包まれて、手持無沙汰さうに八
疊の仕度部屋に坐つて居たお雪の心持ちは少しもまとまつて居なか
つた。何だか他人の事の樣な氣がしてならなかつた。
何時もよりぐつと明るくした店の電燈の光りが、廣い間口から一
杯に外へ流れて、其處には近所の人が皆、暖簾の陰へ隱れる樣にし
て立つて居た。理由も解らない小さな子供までが、がや〳〵と騷ぎ
ながら見て居た。がら〳〵ッと幾臺か車の止まる音がした。はつと
思ふともうお雪の胸は息つかひまで苦い程大きく波立つた、けれど

それを傍に居るお奈美に知らせまいとするそれだけ、餘計に苦しかつた。お奈美は平氣な顔して、煙草を吸つて居た。

奥座敷の廊下を行く幾つかの足音がする。お奈美は吸殻をぽんと叩いて、ちよつと障子の外へ頸を出してのぞいて見た。けれどそこからは見えなかつた。とついと立つて勝手の方へ行つた。雪江は獨になつてほつとした。

じつと氣を落ちつけ樣と思ふと猶胸がわく〳〵した。

「お雪樣！　まアそれは大したもので御ざいますつて、お結納を持つてお出でた若い衆さんがネ皆今店に被在いますよ、背中へ大きく丸に菊の字を書いた印袢纏を着ましてネ」とお奈美は力の入つた低

い聲で雪江に云つた。

「さう」と只それだけ云つてお奈美をそつと見上げた雪江の瞳は美くしかつた。

「雪江、さあおいで」と母のお仲が障子に片手をかけて緣に立ちながら呼んだ。

お雪は氣を落ちつける爲に大きく一つ息をしてそして靜かに立つた。

此間高麗緣に變へた奥座敷には同じ樣な羽織袴の人許りが五六人居た。お雪はぼーつと夢の樣な氣になつて云はれるまゝに下座へ坐つた。

皆の中で一番ゆつたりとした年上の小原といふ今度の仲人の手によつて改めて贈られた結納、祝ひ物の島臺から末廣までずらりとそこへ列べられた。お雪は只どれにも華美やかに結ばれた水引を美しいと思つた許りで外に何を思ふ暇もなかつた。

「それではお前失禮して」と小さい聲で母に云はれて雪江は人形の樣に丁寧にお叩頭をしたまゝ默つて座をはづした。

ほつとしてそつと頰に觸つて見ると湯上りの時の樣にほつと上氣して居た。

お奈美は荒い縞お召に派手な長襦袢を重ねて待て居た。ぐつと襟を拔いて恰好よくそれに着變へると、黑ぽい煤んだ色氣だけれど、

猶前より粹に艶ぽく見えた。

奥では御酒になつたと見えて、ゆすり上げる樣な小原樣の笑ひ聲が賑やかに聞えた。

雪江はどこへ坐つて好いか解らない樣な氣がして緣の柱によりかかつたまゝ、今脫ぎ捨てた着物を疊んで居るお奈美の手先を別に注意するでもなく只ぼんやりと見詰めて居た。そして少し氣が落ちつくと今迄に覺えない違つた心持がした。

「雪江あのお父樣がお前に何かお彈きつて、獨りで嫌なら八重ちやんに琴を彈かせるから」とお仲が忙がしさうに云つて來た。

「まア困りますわ、急にそんな事仰有つたつて」と吃驚した樣に云

つたけれど、さう困つた様な色は見えなかつた。
「住吉位なら好いぢやないか、それに御祝ひ物の高砂でもしたら」
と母も雪江に彈かせたかつた。
「さうネ」と輕く云つたお雪の面にはどこか誇りが見えて、それと同時に自分ながら不思議な程氣が落ちついた。
琴の前へ坐つた可愛い八重子の左側へ、紫縮緬の帛紗から出した撥を持つて俯向いた雪江の姿は、もう振ひつきたい程美しかつた。
お雪はいつまでも〳〵障子の縁に輕く脊を持たせたまゝ恍惚として居た。中庭に咲いて居る花橘の強い香が、初夏のすつきりとした空氣に溶かされて、ゆる〳〵すーつと胸に流れ込んだ様に、ぼー

つとなつて——。

祖母

祖母は遂に逝きました。

五十日の病床に一日も休まず看護した私は、堪らなく悲しう御ざいます。是までの壽命とわきらめはしながらも思ひ出しては泣いて居ます。

祖母は不幸な人でした。よく人が、人間は此世へ苦勞しに來たのだ、と云ひますけれど、それは祖母にあてはめる爲に出來た言葉だと云ひたい位ゐです。

××さん、什麼ぞ私に、祖母の生ひ立ちに就いて私の知つて居るだけの事を、今こゝへ書かせて下さいませんか。

あり餘る程の昔話を持つて居ながらも、祖母はなか〳〵自分の事を語らない人でした。それでも私は母に聞き叔母に聞き、正しき眼を持つた祖母の周圍の誰彼に少しづゝ聞きました。それをこゝへ綴つて見たいと思ひます。

私には肉身の關係が無いものとして書きたいと思ひますから、どうぞ貴女も其お積りで讀んで下さい。

祖母は××舊藩醫の家に生れました。產聲上げる時からもう祖母の身には不幸といふ字が附き纏つて居たのでせう。祖母が乳をたづ

ねて泣く時には、もう優しき母の面影は、此世から消えて居たのでした。温かき母の腕に抱かれた事のない祖母は、どんなに母を戀しく思つた事でせう。御殿風な嚴格しい乳母に育てられて温かき母の愛を知らない祖母は、寂しい子だつたさうです。勝氣な姉の手強い仕打ちを見る度に、内氣な纖弱い祖母は甚麼にはら〳〵して居た事でせう。

家門の美しい家に產れて幾人の人に侍かれながら、只嫂の樣子を氣遣つては、小さい胸を痛めて居たのです。まだ蕾も堅い十四の春、××舊藩臣の××家――今の私の母の實家――へ嫁ぎました。嫁ぐと云ふより人形の何かの樣に連られて來たのでせう。

肩上げ取るのが惜しいより初島田さへまだ重さうな十四の少女ですもの、人妻か何かも祖母は知らなかつたでせう。

其頃は××家の全盛時代でそれは大したものだつたと云ひます。勝氣な嫂の手によつて、祖母の調度は美しく調へられました。けれどもそれには決して温かい情は籠つて居ませんでした。

御所車の大模樣ついた濃紫の振り袖着て、御殿風な高島田に結つた華奢な祖母の姿を、いつも私は想像して見ます。さうした時の祖母の面は何となく寂しい樣に思はれてなりません。

友禪縮緬のふつくりした蒲團に載せられた祖母の駕籠の後から何荷と續く美しき調度を見て人は皆、

「お汐さんは幸福者だ」と羨んださうです。

世の荒海へ手放され樣とする日に載られた其お駕籠蒲團は、今日死出の旅路の恙なかれと哀れな祖母を見守つて行きました。

濃紫の其振袖は、祖母の遺言によつて私の許へ紀念におくられました。私は〳〵一生これを放すまいと思つて居ます。

××家は門閥も美しかつた財産も祖母の實家より多かつた。けれどそれでも祖母が幸福とは云はれないと思ひます。

私の祖父――祖母の夫――は四人の女姉妹の眞中に生れたので兩親の愛を一身に集めて好な我儘をして居たさうです。それに十二の年から御殿へ上つて、父の亡くなつた二十歳の時に下りましたの

で世事には疎く、遂友に唆かされて、花街へ足を入れる事も度々だつたさうです。

女は口さがないものです。四人の姉妹は祖父に抱いた不平を、纖弱い祖母に向つて當つけました。養子した姉姑二人は、祖母が來れば直ぐ別居するといふ話だつたさうですけれども、それは緣談をまとめる手段ばかりだつたさうです。

世に云ふ鬼千疋の小姑四人の外に、まだ八十許りになる祖母が健康で居て、何かと目角を立てゝ居たと云ひます。

姑と呼ぶ人は病身で、すべての事を姉娘二人にまかせて置いたさうです。

傍の苦痛は甚麼にもして忍ぶでせうけれど、なぜか祖父までが夫らしい優しい言葉を掛けては呉れなかつたさうです。あゝ其中に一年二年と暮した祖母の身は……。義理ある姉を氣遣ひながら蕾の花まで生ひ立つた祖母は、又誰一人自分を護つて呉れるものもない斯うした中に美しく花も咲き得ないでいつとはなしに萎んで行くのでした。

小さい胸の張り裂ける樣な事も幾度だつたか知れません。けれど何事も胸一つに納めて只の一言受け答へした事の無い、惡く云へば馬鹿見た樣になつて居た祖母は、斯した嫁住みの辛さは人と同じだと思ひます。否凝と堪へて居たそれだけ、より一倍辛かつたと思ひ

ます。それも今に子供でも出來たら、と恁麼大人びた事を當にして僅かに〳〵慰められて居たのださうです。けれど四年五年六年、祖母には晴やかな日が來ませんでした。

毎日一度づゝ屹度隱居家から出掛けて來ては、何かしら小言を云つて行く元氣の好い義祖母も、八十五といふ歳には勝たれないで出て來なくなりました。さうして今度は二日に一度づゝ必ず祖母を呼び上げて、孫どもの告口をさも自分が知つた事の樣になじりましたとか。其年の秋心臟炎で亡くなりました時、祖母は四十日の間一晩も傍をはなさず看護をさせられたさうです。日常の事から推して見て其間の辛さが思ひやられます。

御維新の前の年、長い年月ぶら〳〵して居た姑が亡くなりました。

あゝ祖母には何處まで不幸がつきまとひますのか、「子無ければ去る」の古き諺によつて、四人の小姑共は祖母に出て行けがしに前より猶辛く當るのでした。

なぜ〳〵祖父はそれを護つては呉れなかつたのでせう、只一言でも優しい慰めの言葉をかけて呉れましたら、張り裂ける樣な胸の苦しみも、祖母は忘れたでせうに……。あゝ祖父の夢はまだ醒めませんでした。

例へ姉の心は冷たくとも……と苦しみぬいた祖母の心がふと迷はうとした一日、其頃××町で一と名の知れた或る占ひ者に、そつと

事情を打ちあけたさうです。××さん、はしたないと笑はないで下さい、今とは時代が違ひます、迷信深い人の斯うした境遇に立ち入つた場合としては無理もない、むしろ當然な處置だと私は思ひます。

祖母の運命は定まりました。

「あなたは不幸に生れた人です。たとへ今の婚家を出て二度他家へ嫁ついでも、決してあなたに幸福は向いて參りません。お氣の毒ながら、前世の宿縁とおあきらめなさい」と其占ひの爺さんは云つたさうです。

祖母の迷ひは醒めました、亂れた胸は治まりました。

祖母の小さい胸に堅い決心が出來ると間も無く、それを試すべく

わざと製らへた様に、祖母の前に大山が崩れて來ました。

廢藩置縣の大革新で、祖父は食むに祿ない浪人となつたのでした。はつと思つて目が醒めた時には、もう遲かつた、多いと思つた財産は半ば影も無く消て居ました。それと知つた二人の姉姑は、手早く別居したさうです。無論相當の分產を得ての事です。

二人の義妹は姑の亡くなる後先に、すぐ近くへ嫁ぎました。其二人は今も健康で、祖母の逝く日、私達と一緒に其死を悼んで居ましたが、私は二人の古い追憶が聞いて見たく思ひました。

祖父の氣はいら立ちました。什麼かして早く取り返しをつけたいと思つてゐせりました。而して或る人の手引きによつて商法に手を

出しました。けれどもそれは駄目でした。失敗に失敗を重ねる許りでした。すれば祖父は猶いら〳〵して、其不快さを酒の爲に忘れやうとしました。そして自然祖母へは手强く當ります。それを凝と堪へて、唯祖父の失敗を氣遣つて居る祖母の心は甚麼でせう。

嫁いで九年目祖母は始めて人の母となりました。それが去年東京の×××病院で亡くなつた私には唯一人の叔母で御ざいます。華やかな產神詣でも出來得ない今日、生れた叔母が不幸なのです。父になり得た！　そんな事では祖父のいら〳〵した氣分は治まりませんでした。

其翌年――確か明治三年と聞いた様に覺えます――××の騷動で

僅かに殘つた自分の住家は、人の爲に燒き拂はれました。其騷動の原因は私にはよく解りません、誰も委しく話して呉れませんから。何でも祖母の近所の××家が恨まれて、それが爲に祖母の家まで燒かれたのださうです。さうした家が一軒や二軒では無いさうですから、一時××町は修羅の巷となつて隨分悲慘な有樣だつたと思ひます。

よく其時の怖しかつた事を祖母は話して呉れました。或る事件の爲に町中は何となく殺氣だつて、皆おど〳〵しながら日一日と過して居た或る朝、ワー〳〵ッといふ大勢の聲が遠くでします。はつと思ふと

「それ燒手が押し寄せて來た。××家が燒けた」と外を人が大聲上

げて驅けて來るので、それッと云ふのでもう夢中になつて、祖母は二つになる其叔母を背負つたまゝ、取る物も取らないで×××山の或る寺へ皆と一緒に逃げて行つたさうです。胸は波立つ足は疲れる××寺へ驅け附けた時にはもう覺えが無かつたさうです。

「あれ自家が燒ける私の家が……」と氣もしどろになつた哀れな人人は皆盛に燃える火の手を指して、大聲あげて泣き叫んださうです。

翌朝、我が家は此あたりと目ざして歸つて見ると、見覺えのある庭の石燈籠と、何も這入つて居ない奥藏が殘つて居た許りだつたさうです。私は其話を聞く度に、其燒跡にしよんぼり立つた、祖母の姿が目についてなりません。

それから十何年の間の祖母の困難は普通大抵ではありませんでした。私の母が產れ、間も無く叔父が產れた其翌年、祖父は酒の爲に腦溢血で亡くなりました。

「よくまア其中をお祖母樣は三人の子供を抱へて店をやつて來なつた事、あゝあそれはもう甚麼苦勞だか知れやしない、まアあんな苦勞した人も澤山は無い」とよく母は申します。

「新一――私の叔父――が大きくなつたら又どうにかなるだらうから、什麼かそれまで店を終ひたくない」と祖母は口癖の樣に云つて祖父の仕掛けた其店を、纖弱い女の手一つでやつて來たさうです。零落しても家門の美しい爲に、叔母も私の母も着のまゝで嫁ぎま

した。

後に殘つた母と弟が氣遣はれて、母は幾度歸らうと思つたか知れなかつたさうです。

天も祖母の忠實を嘉しましたのか、叔父の大きくなるにつれて家運も漸く立ち直つて來ました。祖母はほつとしました。

けれどそれも束の間、祖母の胸はまた暗い雲に閉ざされました。叔父は何を夢見たのか、ふと横道へ足を入れる樣になりました。我が子にさへ手强く云ひ得ない祖母は拜む樣にして諫めました。けれどなか〳〵叔父の夢は醒めませんでした、そして遂には姿のみ美しい女に、祖母は口先許りで姑と云はれる樣になりました。

「新一少しはお母様の今までの御苦勞を思つてお呉れネ、第一御先祖へ對して申譯が無いぢやないか」と泣て賴んだ二人の姉の言葉も水の泡となつたのでした。

それから十年家運こそ美しく立直りましたけれど、祖母の胸には永久に春は來ませんでした。

唯姿のみ美しくする事を知つて、人妻は何か主婦の何かも知らない嫁を、祖母は何も云ひ得ないで唯其仕打ちをはら〳〵しながら見て居る許りでした。そして何時とはなしに其嫁を氣遣ふ樣になつて毎日おど〳〵しながら、三人の孫にせめられて六十五の今日、哀れに逝きました。

祖母の悲慘な一生を書くには、餘りに私の筆が拙ない、それを私は堪らなく殘念に思ひます。も少し順序を立て、上手く書きたいと思ひましたが氣許りいら〳〵して思ふ樣に書けません。あとは貴女の御想像にお委せしたいと思ひます。

母

「喜多屋のお時さんが流産したつて」

お波が裁縫の稽古から歸つて來ると、母のお貞は待ち倦ぐんで居た樣に急き込んで斯う云つた。

「まアさう」とお波も眞から驚いたらしく、大きな眼をして母の顏を見詰めた。而して

「まア一寸も知らなかつた、誰がさう云つて」とすぐ問ひ返した。

「先刻林屋のお内儀さんが買物に來てさう云つたよ。一昨日の晩だつて」とお貞は何時もの樣に、長火鉢へ兩肱をついて早口に云つた。

「お時さんの子なら甚麼に可愛いでせうに、惜しい事したのネ」とお波な話に身が這入つたのと、手先が冷たいのとで、ひたと長火鉢へ寄り添つて、溫かさうに上氣した、母の顏を見上げた。

「フ、ン、大きな聲ぢや云はれないけれど、亡くなつて幸福さ、人つて云ふものは入らないお世話を何時までも色々な事云ふからネ」とお貞は火の活氣でどんよりした眼をわざとお波の視線から外して冷笑ふ樣に云つた。

「だつてもう好いぢやありませんか、繁太さんを入婿つたんですもの」とお波は母の云ひ方が氣に入らないので捨てる樣な云ひ方をし

た。

「所が世間の口はなか〳〵喧しいからネ」とお貞はまた輕蔑む樣に云つた。

「……」默つて灰を掻平しながら聞いて居たお波は、嫌な氣持ちがした。

ばつと電燈が點いた。そこらが明るくなつて夜らしくなると、

「おや、もう電氣が來たの？」とお貞は彈かれた樣に立ち上つた。

「何しろまア嫌な事さ」と獨言の樣に云ひながら、勝手の方へ行く母の後姿を、眤と見詰めて居たお波の美しい瞳には、不快らしい濁つた色が漂よつて居た。そして母の姿が見えなくなると、

「知らないと思つて――」と力のある小さい聲で口走つた。

「……お波ちやん、其麼事誰にも仰有ちや不可ませんよ、お波ちやんの父樣はネ、お波ちやんが母樣のお腹へ出來てから來なすつたんですよ」

仕事婆さんのお作さんが云つた此言葉を、お波はまた思ひ出したからである。

お波が踊を習ひ始めた八つの歳であつた。中庭の八重櫻が眞盛りだつた日の暮れ方、話好きのお作婆さんが何時もの裏二階で派手な裾模樣の紋付を忙がしさうに解いて居ると、そーつと音のしない樣に階子段を上つて來たお波は、笑ひながら足音を盜んで、

「トッ」とお作婆さんの肩へ捉つた。

「あれ、またお波ちゃんは……」とお作婆さんは喫驚した様にお波の可愛い顔を肩越しに見上げた。

「オホ……喫驚して？」とお波はさも得意らしく莞爾した、がすぐ其着物に目をつけて

「わら是誰の？　母様のでせう」とくるりと前へ廻つてお作婆さんの明り先へぴたりと坐つた。

「えゝ左様で御座んす、母様がお嫁様の時お召になつたんですよ、それを婆やが斯うして早く解きましてネ。もつとずつと派手な色にお染め變へになるんですつて、然うすると又婆やが、立派にお波ち

やんのにお仕立申して上げますよ」と眼許の優しいお作婆さんは、明り先へ坐られても別に顰顔もしないで、長い袖の紅絹裏を、ギウギウ云はせて解きながら、斯う云つた。

「え、私のに？　私の處にお振り袖が二つもあるにまた是も？」と前髪を切り下げたお波は、嬉しさうに聞いた。

「えゝ」とお作婆さんは大きく點頭いて、「お嬉しいでせう、だからお波ちやんはお幸福だつて云ふんですよ、好いた仲に出來たお子ですもの、可愛くて堪りませんわネ」と終ひは獨り言の様に小さい聲で云つた。お波は唯何となく嬉しかつた。そして無闇に母の若い時の事が知りたくて、執念く聞いた。それをお作婆さんは別に煩いと

も思はないで根氣よく話して聞かせた。其時である「……お波ちやん其麼事誰にも……」とお波には一生忘れる事の出來ない言葉をお作婆さんは別に苦にもしないで普通の聲で、お波の胸へ刻み込んだのは……。

其時は、それが何となく好い事の樣に思はれて、お波は他愛無くにこ〳〵して居た。けれど其心持ちは長くは續かなかつた。何時とはなしに母の愛に反抗する樣になつた。「波ちやんは此頃什麼したの？　眞實に不可なくなつたネ、前は恁麼娘ぢやなかつたけれど……」と母のお貞が度々云ふ樣になつた。其麼事を云はれると猶焦れつたくなつて、唯理由もなく泣いた。

喜多屋のお時さんの話が出ると、お貞はいつも口汚なく輕蔑んだ。其度にお波はじり〳〵する程嫌な氣がして、わざとお時さんを庇ふ樣な事許り云つた。さうしてお貞が不安らしい顏をするのを見ると何か或る物に勝ち誇つた樣な氣がして、冷たい笑ひ方をした。

勝手で高調子に笑ふ母の聲がする。眤と火鉢の中を見詰めて考へて居たお波はついと立つた。そして

「母樣お湯へ行つて來ますよ」と障子の外から優しみの無い聲で云つた。

「今から？　もうすぐお夕飯だのに」とお貞は大きな聲で問ひ返した。

「お夕飯なんか食べなくたつて好う御座んす、さうして今夜お時さ

んの家へお見舞に行つて來ますよ」と云ひ捨てたまゝ、母がお燗でもつけて居るらしい聲で何か云つて居るのを聞かうともしないで、中形友染の前掛けを掛けたまゝ、店の名入れの手拭ひを持つて、お波は露路口の格子戸をがらつと明けると、ふいと外へ出た。花街近い夕暮の町は、何となく色づいて居た。

嫂

寒い國はもう雪がチラ〳〵して居た十一月半ばの或る朝、私は上野行きの一番列車に乘る爲に、まだ燈りの點いて居る××驛へ驅けつけた。

急がしく車から下りると、未だ早いのか、廣い待合はガランとして、高い天井から釣るされた幾つかの電燈が、明けがたの冷たい空氣をぼーつと明るくして居た。長いベンチの隅の方に、寒さうに小さくなつて腰掛けて居る人も、薄暗い小窓の下で切符を買つて居る

人も、皆外套の襟や肩掛けで、冷たい頰を包んで居た。

改札口ではもう私の來る前から切符を切つて居た。私は「××驛より上野まで」とした赤い切符を挾んで貰つて、大きな風呂敷包みを抱いたお婆さんの後から改札口を出た。片手には幾らかのお錢を握つて居た。私はそれを一寸數へて見て莞爾した。二等室へ乘つたつて詰らない、それより是で何か嫂さんにと、ふと思ひついて、上野まで三等を一枚……」と判然云つたのが自分ながら嬉しかつたからである。

橋を渡つて向ふ側へ行くと、長いプラットホームは待合ひと同じ樣に靜かでそして寂しかつた。

幾つか列んだ三等室は、どの室も皆隙であつた。私は何室でも好いと思つてそこらへ入つた。

屋根から下された眠い樣なランプは、向ふ側に居る人の顏も好く解らない程暗かつた。私は格別でも暗い隅の所へ小さく腰掛けた。そして室の內をそつと見廻した。皆の顏がぼーつと眠さうに見えて朝の樣には思はれなかつた。それに寒い故か誰もさう大きな聲で話などする者もなかつた。

ガタンと一つ搖れて汽車は靜かに動き出した。私はハッとした。

「嫂さんに逢へる！」と思ふと胸がわくわくした。それを强ひて抑へる樣にわざと落着いた風をして俯向いて居た。

犀川も千曲川も通つて何時とは無しに夜が明けた。此邊りの景色に倦きて居る私は一寸も外を見ないで、すぐ前に腰掛けて居る四十許りの男の所有らしい、大カバンの模樣を眤と見詰めたまゝ、今日始めて逢ふとする嫂の事を、色々に想つた。

日本橋の××銀行へ出勤て居る兄が、同僚の三木樣の妹の今の嫂をもらふと云ふ緣談の出た時、私は只理由も無く嬉しかつた。それを母は

「東京者なんか……」とかたで耳にも入れなかつた。私はそれが自烈つたくて〳〵堪らなかつた。

「ネ母樣、兄樣は什麼せ一生東京でお暮しなさる方なんですもの嫂

さんは矢張り東京の女をお貰ひになつた方が好うございますわ、とても田舍者になんかあの中を切り廻して行かれやしませんもの、第一兄樣が嫌だつて被仰いますよ」とそれから去年の春二月許り兄に經濟をまかせられて困つた事や、其時私の瞳に映つた都會の女の美しい所許りを並べ立てゝ、

「だからネ母樣お貰ひなさいな、大丈夫ですよ××女學校の出身だつて云ふぢやありませんか」と恁麼事まで持ち出して母を說いた。

「いくら何女學校の出だつて人中に馴れた女は矢張り擦れて居るからネ」となか〳〵莞爾しさうも無かつた母を、私は遂々納得させた。

けれど日比谷の太神宮で兄が結婚式を擧げた時、母は伯父を代理に

やつて行かなかつた。私は其時酷い盲腸炎を病みながら、床の中でじたばたする程それが慊きたらなかつた。それを母は平氣な顔をして「お前が恁麼に惡いのに什麼して行かれるネ」と云つて居た。それから四五日すると表書の美しい手紙が來た。

私は封を切らない前から只懷しくてならなかつた。胸が小さく波立つのを凝と抑へて、急がしく讀んだ。とそれが、私の胸の奥にある或るものにしつくり合つた樣に思はれて、私は「嫂さん！」と縋りつきたい樣な返事をすぐにも出したい程嬉しかつた。それを母は浮かない顔をして默つて讀んだ許りであつた。

嫂からは續いて絶えず手紙が來た。私は一度毎に懷しさが增した。

母は何時までも始めの時と同じ樣な顔をして居た。

「手紙の文句は上手いものだネ」と冷笑ふ樣に云つた事もあつた。私は其度に母樣はどうしてかう固質なんだらう、と思ふと何と無く嫂に惡い樣な氣がしていら〳〵した。

「――俊さん入京して下さいますの？　お母樣がお宜しいつて？　まア嬉しい。明後日なんて何だか夢の樣な氣が致しますわ、俊子さんお僞しになつては嫌でございますよ。一番と申しますと東京へ二時何分着で御ざいましたのネ。丁度日曜ですから兄樣と屹度〳〵お迎へに出て居ますよ。私どうしませう先刻から戴いたお手紙を出したり入れたり狐につまゝれた樣な事をして居りますの、何故で御ざ

いませう……」

此麼手紙を私は、行く前の日、着物の一杯に散らかつた中で讀んだ。淺間山の煙りを皆が珍らしさうに見て居る時も、私は二三枚の寫眞を通して見た、品の好い山の手式の嫂を想つて居た。

落葉松許りの所を通つて輕井澤へ着くと、朝××驛を出た時と同じランプが屋根から下された。曇つてこそ居たけれど明るいので燈りの色が馬鹿々々しく見えた。トンネルの中へ這入ると皆眠さうに目をふさいで、出るとすぐまぶしい樣な顏をして目を明いた。さうして二十六のトンネルを越して。

上州と武藏野との境ひはわからなかつた。

赤羽で七八人の旅商人が大きな荷物を持つてどや〳〵と這入つて來た。私は押し潰されさうだつたけれども、もう少しの間だと思つて我慢して居た。

汽車は靜かに廣い構內へ這入つた。私の胸は高く波立つて來た。そして妙に氣遲れがしてわざと落着いて居た。一番出口に居ながら皆の出た後から靜かに下車た。どんなにも早く嫂の姿を見附け樣としなければならないものを、眤と俯向いたまゝそつと皆の後に附いて長いプラットホームを成るたけ遲く歩いた。

「何ぞお母樣に宜しく」と落着きの無い上づつた聲で嫂に送られて

私は風の強い日に上野を出た。

電の思ひ切つて出たそして後のきゆつと立つた大きな丸髷、半襟の掛つた荒い縞お召の着物、色のくすんだお召のコート、クリームのショール、それらがプラットホームの柱で見えなくなると、私はついと窓から顔を引込めた。がつかりした様にぐたりと柔かいフラシ天張りの上へ腰掛けると、寂しい様な心細い様な、人が居なかつたらきつと涙のせき上げる様な思ひが、胸一杯に込み上げた。

「それ、それだから」とさも勝ち誇つた様に云ふ母の顔を見るのが辛い……と思ふと、什麼しやうともうそれが心配で堪らなくなつて來た。

振ひつきたい様な其手紙と、慕ひこがれた私の眼に映つた眞の嫂とは、餘りに〳〵違つて居た。唯わけも無く無性に戀しがつて居た幼稚な自分が、腹立たしかつた。

汽車は何日か私の美しい思ひを乘せて行つた時と同じ道を少しも間違へないで山の中へと歸つて來た。

横川で何時ものぼんやりしたランプを下された時、私は抑へつけられる様なトンネルの中の暗い空氣を思つて嫌な氣持ちになると同時に、それよりまだ一層何か強い苦しみを與へられる様な氣がして思はず顔を顰めた。

お稽古歸り

マガレット「一寸明後日のお淺ひに髪何に結つて？」

お下げ「さうネ、マガレットが好かなくてネ？　お澄ちやん」

桃「えゝ好いわマガレットが……。リボンは此間のにしませうよ」

マ「此間の？　さア困るわ、私ネあれ短氣起して苦茶々々にして終つたのよ、歸つたらよく火熨斗かけなくちやあ」

お「嫌ネ美耶ちやんてば……」

桃「私ネ家の母様のマガレットたら眞實に氣に食はないのよ、好いのネ美耶ちやんも春ちやんも姉様があつて」

お「美耶ちやんのお姉様もうぢきお嫁様にいらつしやるんだつてネ」

マ「嘘よ其麼こと」

お「あら隱したつてちやんと知つて居るわ、ネお澄ちやん……」

桃「えゝもう昔からネ」

マ「あら彼麼嘘許り……」

お「だつて家の姉様が香鶴さんは京都式の美人だから丁度好いつて云つたから、什麼して？つて私が聞いたら京都へお嫁にいらつし

やるんだつて云つたわ」

マ「……」

桃「それ御覽なさいな、お目出度う」

マ「知らないわ」

桃「ぢや明後日はお振り袖で高髷でせう」

お「えゝ無論さうよ、ゆふべ家の姉様にも島田にお結げつて云つて被在したわ、家の姉様は島田なんか一寸も似合はないから止すと好いのに……」

桃「あら彼麼事云つて……よくお似合ひになるわ、貴女よりずつとお綺麗ですもの」

お「えゝそれはどうぜ私はお多福よ」

マ「おや是は御挨拶！　御免なさい」

お「嫌よおほゝゝゝ」

桃「おほゝゝゝ」

マ「あ、困る！　私爪箱彼家へ置いて來たわ」

桃「嫌な人ネ、待つて居るから早く取つていらつしやいよ」

マ「えゝ飛んで行つて來るわ」

お「おほゝゝゝ氣樂な人ネ」

桃「眞實にネ」

お「……」

桃「……」

桃「まア美耶ちやんてば何時まで待たせて置くんでせう」

お「眞實にネ、屹度また誰かと無駄話して居るのよ、彼麼氣樂な人つて有りやしないわ」

桃「あゝ彼處へ來てよ、あれあんな他見なんかしながら」

お「美耶――ちやん早く被入いよ」

桃「まア何して被在したの？　人を散ざ道の眞中へ待たせて置いてさ」

マ「おほゝゝゝ御免なさい、私ネ西野さんが餘り安宅をつかゝつて許り居たから少し立て聞て居たのよ」

桃、お「まア氣樂な人！」

マ「おほゝゝゝだつて西野さん此間安宅上げた許りの蒸氣のほやほやでせう、それだのにまるでつかへて許り居るんですもの、面白かつたから……」

桃「さう――。でもあの人明後日安宅するんでせう」

マ「えゝ、だからお師匠樣やきもきして被在したわ」

お「困るでせうネ、あゝ困るつて云へば一寸、私達の汐汲みも長くて困るのネ」

マ「眞實にネ、笠盡しからにして貰ふと好かつたけど」

お「どうせ私駄目よ」

マ「私なんか猶よ、だつて私お三味線が入るとまごつきさうで困るんですもの」

マ「八千代獅子の方がずつと聞き榮えがあつて其割りに樂で好いわネ」

お「八千代獅子は尺八が入るんでせう、嬉しいわ、私尺八の音が大好」

桃「だけどお三味線が入らなくてお琴だけなら詰らないものよ、私はあの粋な根〆めが好いわ」

マ「私は一番お琴が好き」

桃「おほゝゝゝ皆別々ネ」

マ「ぢや明日からお澄ちやんはお三味線、春ちやんは尺八を習ふと好いわ、三人で合奏出來て」

お「さうネ、ぢあ明日からさうしませうよ、おほゝゝゝ」

マ「あら向ふから來たのはA組の森さんぢや無くて？　馬鹿に氣取つて歩いて居るのネ」

桃「あゝさうよ、一寸向ふからお叩頭するまで知らない顏してませうネ」

お「えゝそれが好いわ、私あの人たら大嫌ひ、原先生のお花だなんて、それは威張つて居るんですつて」

桃「何だか好かない人ネ、私も嫌ひだわ」

マ「私もよ」

お「まアあのお叩頭の仕様は……」

桃「酷いのネ、まるで人を馬鹿にして居るわ」

マ「あの澄し方……、小面が憎いわ」

桃「あの人の姉様、それは不品行んですつてネ」

マ「えゝ〳〵もうさんざ新聞で叩かれたのよ」

お「まアさう！　ぢやあの人だつて矢張り不可ないでせうネ」

マ「どうせさうでせうよ」

桃「學校の名折れにならない内に、好い加減で彼麼人退校ると好いわ」

マ「眞實だわ」

お「不品行つて云へば美耶ちやん、あなたの後の宮川さんの話聞いて？」

マ「いゝえどんな事？」

お「それは酷い話聞いてよ、あのネ……、まア止しませうよ恁麼道中でなんか……」

マ「それもさうネ、あゝさう、今夜も貴女の姉様家へ被入るつて云ふから其時春ちやん一緒に被入いな、お澄ちやんも……さうして其時ネ」

お「えゝ有難う、母様が好いて云つたら上がるわ」

桃「美耶ちやんと春ちやんお姉様、明後日何なさるの？」

マ「千鳥と那須野よ」

お「千鳥つてあの淡路島通ふ千鳥の……つて云ふんでせう、好いのネ早く聞きたいわ」

マ「だから今夜被入いな、それは姉様達は氣取つて唄つてよ、私等見た様に金切り聲なんか振り上げやしないわ」

お「若し行かれたら三人で合せて見ませうネ」

桃「えゝ合せたいわ、もう明日きりさらは無いんですもの」

マ「ぢや被入いな〳〵ネ、屹度ネ、待つて居るわ」

お「えゝ若し行かれたらネ」

マ「嫌！　春ちやんてば、人ぢらしな……」

桃「私暗くなつたらお琴持たして上げでよ、どうせ母様が好いつて云ふに定つて居るから……」

マ「えゝ成るたけ早くネ、春ちやんのお琴は昨夜のまんま有るから丁度好いわ」

お「おやもう此處へ來ちやつた、話ながら歩くと早いものネ」

桃「さていよ〳〵お別れネ……」

マ「ぢや屹度被入いな、待つて居てよ」

お「えゝ有難う、さようなら」

桃「有難う、ぢや左様なら」

▼「さようなら」

母と嫂

私はもう此處に居るのが嫌になりました。早く學校が始まれば好いと思つて居ます。母のあの齒痒い仕打ちを、凝と見て居るに忍びませんもの。

痩せた小さい自分の身體よりまだ氣の小さい母が、絶えず嫂に氣兼して居る事は、決して今始めてゞはありませんけれども、此春私が出京前より猶酷い樣に思はれます。

「嫂さんは一體どんな氣がして、あの氣の弱い母樣につん〳〵なさ

るんですか」とろく〳〵母の言葉に返事もしない嫂の前へぴたりと坐つて、詰りたく思ひますけれども、兄の手前控へて居ます。又私として出來ない事でせう、只母を氣の毒だと思つて居るより仕方がありません。

おと近な二人の孫にぐづられて、夜もおち〳〵眠れない母は、もう暗い内に目を覺して起きやう〳〵とするのです。と其度に抱いて居る光子の方が、お祖母ちやーんと泣くものですから。

「什麼した〳〵泣くぢやないよ、よ、お祖母ちやんはこゝに居るからなア」とまたそつと横になつて宥めます。それを幾度もして、いつかそつと起きます。

「母様もうお起きなさるの！　構はず嫂さんの起きなさるまで寢て被在れば好う御座んすのに」と私が力のある、それでも光子が目を醒さない樣に小さい聲で云ひますと、

「さうして居るとめつた遲くなつてなア、嫂さんは赤子が泣くと不可ないからそつとしてお置き」と云つて、音のしない樣に靜かに勝手へ行きます。

私は見兼て母の後を追つて、朝飯の仕度にかゝります。――私が歸省した次の朝から斯うなんです、――。それでも嫂さんは別に濟まないとも思はないんでせう。乳が出なくては時々泣く、此二月生れた廣を「なぜさう泣くの！」なんて叱りながら、御飯の火が引け

る頃まで寢て居ますもの。

母は其間にお襁褓を揃へて、練牛乳を立てゝ、嫂が廣を起すのを待つて居ます。

もし其間に二階から光子か其上の俊雄の泣き聲がすると、急いで飛んで行つては、

「おゝよし〳〵泣くぢや無いよ、お祖母ちやんが居なくて惡るかつたな、さア起きするか」と二人の孫の機嫌を取り〳〵、起して來ます。そして二人の顏を洗つてやりながら、

「母ちやんにも父樣にもちやんとお手々をついてお早うつてするんだよ、よ、お悧口だからな」と云ひ聞かせて居ます。

餘り母が小用が有つて氣の毒な時には、私が洗つてやる事もあります。それを嫂さんは嫌な程知つて居ても「まア今朝は祖母ちやんに洗つてお貰ひしたの、よかつたネ」など、晴れやかな笑みなど見せた事は、まだ一度もありません。いえ決して私は其麼お世辭を云つて貰ひたかありません、けれども、暫く居なかつた私にさへ斯うですもの、推して母への仕打ちが察しられます。私は只それが悲しくてなりません。

嫂さんだつて別に惡氣が有つてゞありません、性來が極く無愛想でお世辭など云ふ事を嫌ひな處へ持つて來て、母はそれを直さうともしないで、餘りお靜〳〵と機嫌を取り過ぎたものだから、嫂さん

はずーつとそれで押し通して、あんなになつたのでせう。けれども、麹町の義従姉さんがあの叔母さんによくする處を見て來た私の眼には、餘りに嫂の動作が飽き足らなく思へてなりません。

もう堪らない程いら〳〵する時には、構はず麹町の義従姉の話をして遠廻しに嫂にあてつけるのですけれども、一向御當人には感じないらしくて、反つて母が傍ではら〳〵思つて居ます。

「何故母様は嫂さんにあんなに氣兼許りして被在いますの！」と、夜床に就いてから、低い聲で聞きますと、

「別に氣兼するつて云ふぢや無いけれどもナ、兄様はあゝして始終出張勝ちだし、子供は大勢だしな、もし今嫂さんに病みでもされた

ら、什麼斯うと云ふ様な事があつたらそれこそ困るからな」と恁麼なまぬるい様な優しい事を云つて居ます。

來月歸校の時には是非母を連れて來る様にと、麹町の叔母によく頼まれましたけれども、什麼してあの母が行かうなんて云ひませう。

私は什麼して母の氣を唆る様に、花屋敷の面白い事や、歌舞伎座の舊劇の好い事や、銀座の夜店が賑やかな事など、暇にまかせて話しますけれども、

「今私が居ないと嫂さんが困るからな、まアもう四五年も立つて子供が手離れる様になつてから行かう」と又しても嫂の事を氣づかつて居るのです。

また私は例へ十日でも、二十日でもあのうるさい子供から母を離して華やかな都會の空氣に觸れさせたいと思ふものですから、

「家なんか下女を頼めば好いぢやありませんか、一體兄樣が下女を置けつて仰被るのに母さんがまア〳〵つて斯うして朝から晩まで雇ひ婆さん見た樣に働いて被在るんですもの、其麼時でも雇女を頼まないで什麼しませう、ネ母樣左樣して出京いましな」とわざと調子を強く云ひますと、

「大そうも無い、まア其麼事してまで行かずさ」なんて、てんで行きたいなどゝ思つて居ないらしいんです。嫂さんはまた私がいくら其麼話をしても、

「お母樣家の方は什麼にだつてしますから行つて被入いまし」などとは一言も云ひません。例へ表面だけでも、若しそんな優しい言を云はれたら、母は甚麼に喜ぶでせうけれども……。

恁麼ですから、待ちこがれた始めての歸省も、思ふさま母の慈愛に浴する事も出來ないで、却つて叔母の家の暖かい空氣が懷しくて、早くあの春の樣な香に醉ひたいと思つてやみません。けれども〳〵又私が上京た後の母の苦勞を思へば——あゝ堪らなく氣がいら〳〵します。お察し下さいまし。

お祖父さん

今年八十五になる、耳の一寸も聞えないお露のお祖父さんは、今朝も何時もの樣に薄暗い内から起きて、庭を塵一つない樣に掃いた。そして眞中の少し大きな飛石の上へ立つて、曲つた腰をウンと延した。

自分の脊よりも長い竹箒を、傍の大きな樫の木に立て掛けて、片片づゝ脊中へ手を廻したお祖父さんは、テク〳〵と茶の間の方へ行つた。そして

「さア〳〵起きないかや、お靜もお露も……。もう先刻に夜が明けたぞよ」と、古い雨戸の外から、弛みのある聲で云つた。中からは何とも返事が無い。耳の聞えないお祖父さんは其麼事に頓着無く、すぐ引き返して裏の前栽へ行つた。

「お祖父さんの早いのには困つて終ふ」と、母のお靜もお露も、何時もの樣に今朝も床の中で云ひ合つた。

「大儀だらうからお前はもう少し寢てお居で」と、お靜は娘に云つて、ぐつすり寢込んだ後の倦さに堪へない樣に、大きな欠びを一つして起きた。

自分許り寢ても居られないといふ樣に、お露は六月許りの重い體

軀を、さも〳〵持て餘した樣に、のそり〳〵と起きた。

縣廳へ出勤る養子の光次は、四五日前に出張してまだ歸つて來ない。

お釜の火をやう〳〵焚きつけた頃、お祖父さんは、夜露で濡れた美しい瑠璃色の茄子を、大きな節の高い手に五つ許り持つて來た。そしてそれを、酷く釜の火が燻つてお靜もお露も顰め顏して居る、勝手の板の間に默つて置いて臺所に落ちて居る芥を二ッ三ッ拾ひながら座敷の方へ行つた。

「さア又お祖父さんのお勤めだよ」と、お靜は長い火箸でお竈の火を繕ひながら、濁つた聲で云つた。

「毎朝々々お勤めのお對手させられてはウンザリして終ふわ。お祖父さん獨りでお詣りして被居れば澤山だのに」と、お祖父さんの耳の聞えないのに馴れて居るお露は、平氣で大きな聲で云つた。お靜はそれを叱るでも無く、眞實だといふ樣な顏をして聞いて居た。

お祖父さんは一杯に明け放した八疊の座敷の眞中にペッタリ坐つて、今更の樣に自分で掃いた庭を眺めながら、少し粉になつた煙草を吸ひ始めた。二三服吸つて、終ひにポン〳〵と幾度か詰つた煙管を吐月峯に叩いて見たが、好い鹽梅に吸殼が落ちないので、煙草盆の小さい火箸で掘り出した。漸く落ちた吸ひ殼は、チーと音して白い細い煙りを立てた。

南無阿彌陀佛々々々々と、口の中で唱ひながら、其煙草盆を持つて立つたお祖父さんは、煙草盆を床の間の上に載せて、すぐ右側の大きな佛壇の扉を明けた。

古い位牌が二つ三つある佛壇の中は、お香と線香の煙りで黑く燻つて居た。それでも眞鍮の蠟燭立や花立は、お祖父さんがよく磨くと見えて、綺麗に光つて居る、お祖父さんは各々火打石で火を起して、四つのお燈明を燈した。そして、

「佛樣の御飯は未だかや」と勝手の方を向いて云つた。此聲を聞くと大抵の朝はお露が小さい眞鍮の茶碗へ盛つた御飯を、默つて持つて來るのだけれども、今朝はお露の姿が見えなかつた。

お祖父さんは少し待つて居て見たが、待ち遠しくなつて、「什麼したや」と云ひながら、勝手に見に行つた。まだ御飯を移すには少し早いけれども、またお祖父さんにくど〳〵云はれるのが八釜敷と云つて、お露は御飯を盛つてお祖父さんに渡した。默つて受け取つたお祖父さんは、

「さアお靜もお露もお詣りするだぞ、今日は誰の命日だと思ふ。私の祖父さんの命日ぢや無いか、さア〳〵早く來てよくお詣りさッしやい」と云ひながら出て行つた。

お靜とお露は又始まつたといふ樣に薄ら笑ひをした。

「明日は曾祖父さんの命日、明後日は何祖父さんの命日、お祖父さ

ん見た様な事云つたら毎日命日だわ。」とお露は遠慮無く普通の聲で云つた。

奥からは、チーンと鐘の音の後から、毎朝聞かされる門徒宗のお經の聲が、低く朝の空氣一杯に廣がつてお釜の鐶をガチャ〳〵やる勝手まで、よく聞えて來た。

「又叱られない内に行きませうネ」と、お露は流し元にお釜を洗つて居る母を促した。

「さうさ、遲くなると後が面倒だからネ」とお靜もすぐお露の後から勝手へ出た。

濡れた手を拭き〳〵、二人はわざとお祖父さんに見える様に、少

し前へ出て坐つた。而してさも有難いといふ様に、形許りは謹しさうに手を合せてお詣りした。張りの無い緩い聲でお經を讀んで居たお祖父さんは、一寸其方を見て何とも云はなかつたけれども、其顔に嬉しさうな柔かい色があり〳〵と見えた。

去年の春、光次を入婿つた時、

「いくら何だつて見立に丸髷に結ふなんて嫌だわ、什麼したつて嫌。其麼者何處へ行たつてありはしないもの」と泣いて嫌がるお露に

「馬鹿！　何時まで島田なんか結ふ積りだ、今夜はもう娘ぢや無いぞ、見立には丸髷を云つて見るものになつて居るのだ、其麼今時の眞似などしなくても宜し、丸髷を結ふだ丸髷に！。誰が何と云つて

も私が承知しない」と叱りつけて、遂々丸髷に結はせた、お祖父さんは恁麼小さい事にわけもなく嬉んで居るらしい。

「お母様、今朝はお祖父さんが御機嫌がよささうですネ」とお露は母の顔を見ない様に、眞直に前を向いてお詣りしながら云つた。

「あゝ」と母も瞳も動かさないで答へた。

「嫌だけれど仕方が無いお文章お上げなさるまで居ませうネ」と又お露が云つた。

「さうさ、たまにはネ。而したら今日は一日お祖父さんの御機嫌が好いだらうよ屹度」とお靜は快く同意した。

そんな話の一寸も聞えないお祖父さんは、思ひ出した様に鐘を叩

いてお經をつゞけた。

「お前達は何時も今朝の様によくお詣りすれば、安心して極樂へ行かれる」と朝飯の時お祖父さんは何時になくにこ〳〵して云つた。

「お祖父様、私達はいつもよくお詣りして居たいのですけれども、用があるので仕方無しに下るのです。是からは成たけお終ひまでお詣りして居て、什麼か極樂へ行ける様にお念佛申ます」とお露は半紙へ大きく書いてお祖父さんに見せた。

お祖父さんはそれを眼鏡も掛けないで讀んで、

「ウンさうか」と前より猶にこ〳〵して云つた。

其顔を見て、「お祖父さんの御機嫌を取るのは雜作が無い」と親子

は云つた。

不平

お多美は此頃毎日の樣に、

「あゝ何故東京に居なかつたんだらう。困つてもどの位ゐ氣樂で好いか知れやしない」と云ひ暮して居る。

「又始めた。もう好い加減に諦めるさ」と良人の國造が煩ささうに云ふと、

「だつて眞實ぢやありませんか、鄕里へ歸れ歸れつて云ふから歸つたらどんなにも面倒を見て呉るかと思へば、あゝの斯うのと親類中

して箸の上下しにまで世話を燒いてさ、歸つて來た私達が馬鹿なんですわ」と垢脫けのした小綺麗な顏を顰めて、何時も斯う云ふ、「まア好いさ、今になつて何だと云つたつて、仕方が無い」と國造は定つた樣に此言葉でお多美の口を止めて終ふ。お多美は溫順しく默つて終ふけれども、其顏は中々晴々しない。

國造がお多美を嫁つてから間も無く、東京で一旗揚げると云つて大意氣込みで出京したのは七年前だ。

出京すると翌年、長女の靜子が生れる、お多美は產後が惡くて二月許り床に就く、何かと入費は嵩む、什麼も思ふ樣に行かなかつた。それに一昨年次女の芳子が出來てからは一層生活が苦しくなつた。

國造はもう什麼にも仕方が無くて、嫌な〳〵思ひをしながら鄕里の親類に其始末を打ち明けた。親類では皆云ひ合せた樣に、嫌な顏をして、そして「離れて居ては何かと不便だから、歸つたら何だ、其上で又何とかして遣らう」と國造へ云つて遣つた。

國造は其事をお多美に話した。七年振りの歸鄕！　と云ふ嬉しさがお多美の胸には眞先に浮んで、それが好いとすぐ定めた。不首尾ですご〳〵歸る恥しさも忘れて喜んだ。

國造は流石に餘り好い心持ちはしなかつたけれども外に仕樣が無いので、暗い顏で「ぢや左樣しよう」と云つた。

お多美は色々に鄕里の事を想像した。七年にもなるのだもの、嘸

變つたらうと思ふと、一日も早く歸つて見たくなつた。

下町風に育て上げた靜子が縹緻の好いのを自慢して居るお多美は、おしやまな盛りの可愛い姿を早く皆に見せて遣りたいと、恁麼誇りもむら〳〵と湧いた。

「靜ちやん、明後日はネ澤山〳〵汽車に乘つて、田舍へ歸るんですよ、お郷里にも大勢靜ちやんのお友達があつてよ」などゝ嬉しくて堪らない樣に靜子に云つた。

「お母樣眞實？　あの好いお着物着て？」と芳子を抱いたお多美の肩へ頰さく絡まる靜子を、何時もの樣に叱らないで、莞爾した。

近所の誰彼に送られて上野の停車場を出た時は、流石にお多美の

胸は淋しかつた。けれどそれも何時となく新らしい思ひに消されて終つた。

大きなトンネルを越すと、右も左も山許りになつた。生れた國へ這入つたのだと思ふと、唯懷しさにお多美の胸は踊つた。

旅は淋しいもの、郷里で親類中助け合つて行つた方がどんなに心强いか、困つて歸るのだからつて、身内の一人だもの、嘸皆は待つて居て呉れるだらう、とお多美は恁麼事許り思ひ續けて居た。

歸つて見てお多美はガツカリした。自分の想像はガラヅと外れて親類の仕打ちが餘りに情無いので泣きたい程だつた。

お多美はそれを口說々々と國造に云つた。默つて聞いて居る國造